

# 研究ノート

実習を創る

…………… (まどか庸代・伊藤雅子・大森正樹・山口真人) ……105

大学における演劇を用いた授業の展開

…………… (山口真人・土谷薫・竹内敏晴) ……155

「いろはワーク」と和学「いのち」論形成

…………… (まどか庸代) ……193

# 実習を創る

## 人間関係原論 I, II

1998年度及び1999年度授業の報告

まどか  
蛭田庸代 (南山短期大学助教授)  
伊藤雅子 (南山短期大学教授)  
大森正樹 (南山短期大学教授)  
山口真人 (南山短期大学教授)

### はじめに

人間関係原論は1989年度より実施された新カリキュラムの中の核として、学生全員が必修履修する科目として設けられた。人間関係科は創設時より哲学・心理学・社会学・教育学といった専攻領域の異なる教員が協力して一つの科目を受け持つチームティーチングがユニークな教育実践の特徴であったが、カリキュラム改正後、この方針は更に踏み込んだ形で継続されている。従って人間関係原論も専攻領域の違う4名の教員が担当した。教員チームは何か特別の支障がない限り2年間同一の学生を受け持ち、新入生入学時の年度毎に毎回、教員チームの構成が変わることになる。

カリキュラム改正後の各年度毎の原論授業がどのように展開・実施されてきたかは人間関係研究センター紀要 9、14、16の各号にすでに報告がなされている。この科目の授業は人間関係の原論である側面と、人間関係科の原論である側面を持つものであるが、その年を担当する教員チームに依って、その年の原論の特徴が出てくることになる。

1998年度と1999年度の原論は2年間の授業を5つの時期に区切り、各時期にテーマを設定して授業を組み立てていった。5～6回の授業で構成されるそれぞれの時期を設定されたテーマのもとに一つのまとまった実習として創りあげようとしたことがこの期の特徴といえる。今回の人間関係原論の実践報告では、このことを念頭におきながら、4名の教員が学生達の状況をふまえ協力して創りあげていった授業を、それぞれのテーマ別にその意図、導入の仕方、体験の選択、展開・個別化・一般化の工夫などを述べてみたいと思っ

いる。特に、我々が「創りあげる」過程で重視したのは、5～6回にわたる一連の授業を一つの実習としてとらえ、おおよそ導入部分・展開部分・まとめと一般化部分から構成したことである。テーマによってその展開の仕方は自ずと異なってくるが、学年ごとのテーマ、ブロックとサブテーマに関しての説明のあと、ブロックごとに述べていくこととする。

1 年			2 年	
これまでの文化から 新しい文化を創造する			人関文化を生きる ステップアップ人関	
とも論 4/9～7/16	わく論 9/24～10/22	へんか論 10/29～1/14	かかわる論 4/16～7/9	あい論 9/24～10/22

#### \*学年ごとのテーマ

これまで人間関係研究センター紀要に掲載された人間関係原論の授業報告でもたびたび述べられているが、人間関係原論は我々が人と関わるとはどういうことかを考え、探求する人間関係の原論であると同時に、短期大学人間関係科は何をねらいとして学習し、他の授業科目を関連づけ統合していくかを方向づける人間関係科の原論でもある。そのことを確認して後、4名の教員スタッフは99名の学生とどのようなねらいで授業を進めたいかを述べた。

私が私であることと、他者と共にあることを大切にしながら楽しい原論としたいというスタッフ側の願望がまず確認された後、そのために学生達が自分達で動きやすい参加の場を多く創り、その動く中での学びを大切にしたいとした。そのことは同時に挙げられた以下のことともつながってくるであろう。

- お互いに言っていることを分かりあいながら、言葉の新しい意味を知っていく。
- 知性・感性・霊性の三者を育てる場とするために意味化と感覚化を大切にす。
- 他者を知り、かかわりの中での自分を知り、宇宙の中に存在する「ヒト」を知る人間論への意識を開く。

これらを常に意識しながら、卒業時まで99名の学生と教員スタッフが26期生全員の個々の生き方を大切にする学びの場を創りながら学生達がそれまでに経験してきた文化から“共にある”ラーニングコミュニティであるような「新しい文化を創造する」ことを、まず1年間のねらいとした。しかし、

このねらいはこの期の2年間の原論のねらいでもあり、従って2年生のねらいは1年生のねらいを継承する意味で「人関の文化を生きる、ステップアップ人関」とした。この「人関」の語には、上に述べられた人間関係の原論と人間関係科の原論の両者の意味が込められおり、また、「文化」には1年の間に創造しようとした「新しい文化」を意味している。

#### \*ブロックとサブテーマの設定

人間関係原論の授業は授業時間割表では1年生に対しては毎週木曜日Ⅱ限目(10:40~12:10)、2年生に対しては毎週金曜日Ⅰ、Ⅱ限目(9:00~12:10)が割り当てられている。単位と実働時間数の関係、全学生が参加するとは限らないが前期と後期に2回づつ予定される合宿週による途切れ(区切り)等を考慮して、ねらいの達成を目指して2年間の授業をいくつかの時期(ブロック)に区切ることとし、まず原論Ⅰ(1年生の1年間の原論)を3つのブロックに区切った。

Aブロック とも論/私の世界・新しい世界・私の身近な関係に目を向ける

① 4月9日、16日、23日、30日 オリエンテーション

人トレA(オープニング合宿)の準備時期

② 6月11日、18日、25日、7月2日、9日

Bブロック わく論/人関文化にひたる

9月24日、10月1日、8日、15日、22日

短大祭への参加

Cブロック へんか論/人関文化にひたる

10月29日、11月5日、19日、26日、

12月3日、10日、17日、1月14日

2年生の原論Ⅱにはいる前に、4名の教員スタッフは2年生の授業では「ステップアップにんかん」を意識しながら、2年生らしいねらいで進めることの確認があった。まず、前期全体を4月22日の1年生向け合宿で抜けるほかは、原論としてはかなり多い11回を一つの時期とした。この時期を使って「関わる」というテーマじっくり取り組めたのは結果的に幸いなことであった。Bブロックは10月29日から2年生全員の必修科目である人間関係トレーニングBの学内授業が変則的に入るため、5回のみとなった。

Aブロック かかわる論

4月30日、5月7日、14日、21日、28日、

6月11日、18日、25日、7月2日、9日

## Bブロック あい論

9月24日、10月1日、8日、15日、22日

2年間の授業のおおまかなスケジュールとそれぞれの授業のテーマ、やったこと、ねらい等は「資料1-1~4」の表を参照されたい。

またもうひとつこの原論で意図したことの特徴は、毎回の授業を「ひととき」からスタートしたことであろう。最初の内はスタッフ側のイニシアティブによるものであったが、次第に学生チームが提供するものが多くなったのも嬉しいことであった。そして授業開始前の10分程の時間の積み上げが、共にあることを実感するラーニングコミュニティ作りの促進材料として働いたとも考えられる。

教員スタッフ側も一人一人の学生がたとえ5分間でも皆の前に立って自分の好きな詩、音楽、ゲーム、ダンス、器楽演奏等を提供しながら自分を皆に伝えてみることを、自分にスポットライトを当てる機会を作ることとすすめた。2年間を通して幾つもの新しい試みがなされたことは喜ばしいことであった。

以下はブロックごとに分担執筆と言う形で述べていくこととする。

### 原論 I Aブロック 私の世界・新しい世界・私の身近な 関係に目を向ける とも論

#### I. ねらい

4月9日から7月9日までの期間、5月7日、14日、21日、28日の4回を1年生全員の必修科目である人間関係トレーニングAの合宿準備にあてられた他は、後半全9回を「とも論」を中心に上記のテーマで授業が行われた。

このブロックの前半ではまず、これまで学生の一人一人が生きてきた文化の点検をすることをねらいとした。このためには分析的、統合的、ポジティブ、ネガティブなアプローチ、造形やイメージを用いる方法、文章化してみることを、チェックリストを用いて価値観を明確にする方法の可能性なども考えられたが、これまでの自分の関わりの世界を、人だけでなく「もの」、「こと」等を含めて再確認するために「私の世界地図」を作るという実習をすることになった。

ブロックの後半では自分の身近な友人関係を通してみられる自分の関わり方から「とも論」をテーマに考えることをねらいとした。

## Ⅱ. プログラム構成・実施状況

### 1. 「自分の世界を探る」

4月9日 最初の授業ということもあって、教員スタッフの紹介、前期の日程、出欠のことなどの連絡の後、最初の実習がスタートした。「これまでの自分の文化を見よう」と言うことで好きな色の画用紙と筆記用具を持って一人の空間を作り、B4の白紙に“マイ・ブーム”自分が夢中になっていること、関心のあること、人、グループを単語や短文で出来るだけ多く書き出した。その後、一人20枚づつKJラベルを配布し、それらへ自分が書き出したものの中から気に入ったものを書き移し、そのラベルを色画用紙上に自分でグルーピングしながら並べ、一応納得のいったところではりつけた。自分の位置を中央に置きそれぞれのグループ（ラベルの島）には名前をつけてみた。その後、近くに座っている人と3人ぐらいでグループを作り、自分の地図について話ながら、自分の作品のわかちあいをした。

4月16日 南山短大、ニンカン、26期生等を含めた自分の新しい世界の場や人を知る《新世界探検》ということで、学生同志のペア・インタビューと小グループ活動を行った。小グループ活動は自分達にとってまだ未知の世界と思われる南山短大や人間関係科の様々な場所・人などを取材し、新聞を発行することであった。出席簿の番号を使いながら学生同志のペアを作り、1人の学生が他の学生を必ずインタビューすること、無作為に教員が組んだグループで作業を進めることとした。新聞にはグループのメンバーがインタビューした26期生一人一人の紹介記事を必ず組み込むこと、4月16日の編集会議で決めた取材領域の記事を盛り込むこととした。学生達には、短大入学以来初めてのグループ活動で、身近な世界で自分達の関心領域を絞り込むこと、取材の実施、記事の作成・印刷、グループ発表などを通して、人間関係科のさまざまな側面を学習し、同時に小グループ体験の楽しさを味わってもらうことを試みた。また、グループ活動の最後には、一人一人がグループの他のメンバーとどのように関わってきたかをふりかえてみるという意味をふくめ、記入用紙を準備してお互いにフィードバックすることもおこなわれた。ここまでの授業でスタッフは「わいわいがやがやの授業もありだ」という新しい文化を体験的に学生達に伝えようとしたが、このことはおおむね伝わったようである。

### 2. 「とも論」

ここでは、それぞれの身近な人間関係を、この年令層の学生達が最も気にしていると思われる“友達”を手がかりにして考えてみようと言うことで、6月11日から7月9日までの5回の授業を「とも論」をテーマに展開することとした。どのように「とも論」を展開するかについて、通信手段の発達した現代

社会では広く浅い関係が多く、学生達は深い関係に入り、葛藤を体験することに躊躇しがちではないのだろうか、日常的になり過ぎるとかえって考えにくいこのテーマも、親子・夫婦・家族関係のあり方へのヒントともなり、地球との共生関係を考えることへもつながるのではないだろうかといったことが事前に話し合われた。そして、7月2日は七夕にちなんで、学生達によるお楽しみ会を企画するとして、その前の3回の授業は「とも」を考えることを基調に進められることとなった。一口に人間関係と密接なつながりのある友人関係といっても外側から観察するだけではわかりにくい、友人間で独特のものがあったり、友人になっていくプロセスであったりと様々であるので、少し一般化する方向も模索することとなった。そのために次の二つの案がだされた。

- ①自分の友人関係の全体像をデータとするために「対人関係図」を作り、そこから原論の中でとりあげる課題・問題・ジレンマを引き出せるように語り合う。
- ②友人関係での悩みや気になったことについて話し合い、ディベートのテーマを出す。

①の案は実習の進め方が「自分の世界を探る」に関連してやったものに似ているため変化をつける意味で②案をとることになった。

#### 6月11日 わたしの“とも”

授業ではまず、くじで5人グループを20組作った。グルーピングはできるだけそれまでに話をしたことがない者同士が、楽しみながらグループを作れるようとの配慮をした。実際の作り方は初夏にちなむ言葉、例えば「半袖」「わらび餅」「さわやかな風」などのようなものを20種類考え、その一つ一つを学生個人に配布する日程表の裏に小さく記入して、同じ言葉の人同士がグループを作るようにした。このグルーピングの方法はその後、季節が変わるたびに言葉を変えて何回か使われた。その5人のなかで一人一人が自分が友について思っていることを語り、その後で“とも”について考えるために、この事例だったらこういうテーマでディベートできるというものをグループで一つずつ書き出すことをした。この作業は学生達にとって比較的難しかったようで、いくつかの質問に教員スタッフが答えながら進められた。そして、学生達がグループで書き出したテーマをもとに最終的にディベートのために次の二つのテーマが選ばれた。

- ①充実した人関生活を送るためには、固定したグループに属するべきだ。
- ②友達の好きな人に接近するためには、その子の許可を取るべきだ。

## 6月18日 ディベートの実施

まず、グループごとに代表者を決め、前半は「充実した人関生活を送るためには、固定したグループに属するべきだ」のテーマで、後半は「友人の好きな人に接近するためには、その子の許可をとるべきだ」というテーマでディベートが行われた。具体的な進め方は次の通りである。

### 原論 I 風 ディベートの進め方 資料 2

#### 〔事前準備〕

- ① 6月11日のグループが4つに分けられた。論題に対して肯定（賛成）か否定（反対）の立場を取る。全体の20グループはまずテーマによって二つに分けられ、さらにそれぞれを肯定派5グループと否定派5グループとに分けられた。
- ② 1) 自分達の立場を主張するための論点を話し合い、まとめる。  
2) ラベリング（本の目次のように論点の要点を箇条書きにする）
- ③ グループから1名のディベーター（代表者としてディベートに参加する人）を選ぶ。

#### 〔ディベート〕

##### 進め方

- ① 肯定派 立論 5分 5名のディベーターが各自1分間の持ち時間を使って、事前準備の話し合いでラベリングした意見を述べる。
- ② 否定派 立論 5分 5名のディベーターが各自1分間の持ち時間を使って、事前準備の話し合いでラベリングした意見を述べる。
- ③ 作戦タイム 3分、肯定派・否定派それぞれディベーターが話し合っ  
て、反対尋問の作戦をたてる。
- ④ 否定派 反対尋問 3分 作戦に基づいて、肯定派の対して反論や  
質問をすることができる。
- ⑤ 肯定派 反対尋問 3分 作戦に基づいて、肯定派の対して反論や  
質問をすることができる。
- ⑥ 評価 観客は、ジャッジとして両派のディベーターを〔理論性とア  
ピール度〕の観点から総合的に評価する（拍手の大ききで表現する）

このディベートをするという実習は後半のテーマの語句がやや不明瞭であったものの、友を考えるいろいろな立場に触れることが出来たと思っている。

## 6月25日 教員スタッフのとも論

4名の教員スタッフがそれぞれとも論を語る授業とすることになった。授業



冒頭の“ひととき”では絵本「ぼくを探しに」が紙芝居風に紹介された後、教員が一人づつとも論を語った。教員それぞれの話の切り口としては①友と友でないことの違いを超える発想転換をめぐる（内と外、身内と他人を超えて）、②女性が経験する学生、子育て、仕事を通しての友人観（女性が生きていく中での友）、③日本語独特の、またラテン系文化での友人観（Amigo）、④プラトン哲学におけるエロスをアイデアに高めていく関係について（他者としてのとも）であった。このように教員からの一方的な話の際は、インフォーマルな雰囲気だけで出来るだけ学生一人一人の顔が見えるようなセッティングになるよう、教室の場作りを配慮した。

#### 7月2日 「懐かしの七夕を楽しむ」

学生の企画により学生にリーダーシップをとってもらおうお楽しみ会をした。学生達の参加はかなり積極的であった。会のあと企画グループの一人一人に全学生から短いフィードバックメッセージを記入したものを渡した。

#### 7月9日 「わたしのとも論」を語る。

3人の学生にそれぞれの「とも論」を一人10分程度話してもらった。学生一人一人が自分の言葉で語る「とも論」は、同じ世代の声として、きく者にとって印象的であった。そのあと「わたしのとも論」を探るために約15分ほど個人記入をし、記入したものをもとに2～3人の人で、わかちあいをした。わたしのとも論については、この日に自分の体験や思っていることを皆の前で語った学生にとっては内容的に重複することになり、その点のツメが不足していたことを授業後のふりかえりで教員スタッフから指摘された。また、多感な年齢にある学生達にとっては、自分が今かかえている問題ともろに重なり辛い思いをした者もあった。

#### 7月16日 前期のまとめ

前期の授業日、各回のテーマの一覧表に「私自身が新たに変わったこと」**資料3**を記入できる表を作り、学生達は個人で前期の授業を振り返りながら個人で記入をした。そのあと、「あなたにとって生まれようとしている新しい文化とはどのようなものか —ことば・体験・可能性などを具体的に記述する」というテーマでレポートを作成した。

次のような夏休み課題が出された。

**カラフルトーク十人十色**

いろいろな人のすてきな言葉・感動した話・心に残る体験などを、10人の人からコレクションしてみよう。

本人から、テレビを見て、映画の中で、本の中から、新聞を読んでいる

B6サイズのカード1枚に1つ書いて、すてきなブックレット（小さな本）を作ってみてください

今年の夏の、自分へのすてきなプレゼントを作るつもりで…

新学期にみんなでシェアしましょう。

学生達にさまざまな人、言葉、体験に出会ってほしいという願いから夏休み後、作品のわかちあいをしたが力作が多く、学生達の積極的取組みがうかがえた。

(伊藤雅子)

**原論 I Bブロック 人間文化にひたる わく論**

**I. ねらい**

人間関係原論一年目後期開始時期にあたり、関係における人間・自己・他者の枠組み・価値観・考え方のパターン・パラダイムおよびパラダイムシフト・発想法および発想転換などの視点をテーマとする実習プログラミングに取り組んだ。

人は一人一人 空間的にも時間的にも考え方の方法や生き方のマナーの面で、ある「枠」があてられることで安心して生活しやすくなる。また一方、人は自分の「枠」に知らぬ間に囚われて、思い込みや単一の価値観世界観だけで自分の成長を狭めているということもある。

多価値化時代といわれる現代社会の中で、あるいは「人間関係科26期生」の学習共同体のメンバー同士の理解とコミュニティづくり（仲間・グループづくり）という原論授業の場の中で、さまざまな「枠」を意識化しあい、「わく論」として言語論理化も試み、さらに自分たちの「枠」を超える試みを通して、

自己概念と自己の世界の広がりを実感していくということを「わく論」でのねらいとした。

「枠」という言葉は学生にはわかりやすく、教育の場での「枠」の捉え方やその心理学上の応用と効用については本学での体験学習プログラムを踏まえた「成長するための枠ーラボラトリートレーニングのひとつの意味-」（本学人間関係科監修「人間関係トレーニング」ナカニシヤ出版より木村晴子執筆19）でまとめられている。

科学論や学問論知識論という観点では、考え方の枠組み「パラダイム paradigm」や「発想」という術語がある。人間の概念の発想転換や科学知識におけるパラダイムシフトにより人間社会の価値（システム）体系の変化・変革をもたらされ、人間社会の歴史（プロセス）が見えてくるのである。

ここでの「わく」とは自己概念（自分はこうなんだと決め付けていること）価値観（何を大切に生活しているか）偏見や先入観（他者への思い込みや決め付け）規範 社会通念（当たり前と思っていること）習慣 風俗 「らしさ」へのこだわりなどで、枠のマイナス面プラス面、自分の内側に作る枠と外側に作る枠、自分を縛る枠と自己解放してくれる枠などさまざまな側面を検討していくことを想定した。

「わく論」の大きなねらいは、自分の枠の在り様に気づき、その枠自体の「名づけ」や言語化によって「自己の枠や価値観とは何か」を知り、さらに枠はずし・発想の転換・他者の枠への気づきや受容につながるような行動変革への洞察やアクティブな行動目標を持つことにある。

枠は 自分の身近な生活や実感の中に潜んでいるものであって、概念的に学習することを避ける工夫がある。そのため、夏休み直後の学生状況の中で、第一部では休暇で気持が「ワクワク」という各自の自由の実感からスタートして人間のもつ「枠」「価値観」「ものの考え方」「パラダイム」に関する自己検討・人間関係の論点を明確にしていこうとした。

枠の種類として 枠のプラス面マイナス面、自分のうちに作る枠と外からなされる枠、今（かつて）私を捕えている（いた）枠、など様々な様態で存在している。

第二部では 自己の枠組み検討（その1）として、自分の枠を実感のまま表現してみる。自分を捕えている様々な枠をシンボリックに表現してつくる。

第三部では 自己の枠組み検討（その2）として、表現された自分のアートを自分の目の前で配置換えや 並べかえ、ひっくりかえしたり、移動させたりしながら固定観念を揺さぶり、分析・整理・理解・言語化へとつないで眺めてみる。

自己検討の視点として、①枠そのものの質・種類など特性の検討 および②枠の自分への影響関係 が考えられる。 また、検討段階を「わく論の大きなねらい」に対応させて3段階にわけ、自分の一つ一つの枠について第1段階：

自分の枠の検討①②、第2段階：名づけてひっくり返す、つまり枠の命名と定義およびその逆発想に気づくことで自己の世界を拡張する、第3段階：これらにむけて変革したい自分の枠の変革検討をする。

第四部では さらに自己の発想転換や他の枠組み理解受容への行動目標を意識してみる。

## II. プログラム構成・実施状況

### 10月1日 わく論導入

「ワクワクからわく論へ」～自分を捕らえているわくの存在に気づく～  
小講義「戻ってきたぞ、人間関係科にんかんへ」

夏休み直後の後期開始の授業にあたり、新しいテーマの提示およびその導入としてスタッフ教員2名の「わく論」の小講義をする。

スタッフトークⅠ：「ワクワクからわく論へ」

(要点) 夏休みの休暇で 私たちの生活は 日常の学校枠(時間割)や規制からはずされ、ワクワクした気分になる。休暇ということ人々は身もこころもリラックスして、ワクワクと自由な気持ちになる。それはなぜか。自分の枠組みで生活できる時間が確保されることで、自由になる場面と、不自由になる場面とがある。自分自身の「枠」とはどんなものなのか? また、自分を自由にする枠と不自由にする枠とは どのような枠組みを持った考え方なのか? いくつかの枠組みは自分の中でどのように共存共生し合っているのだろうか。それをテーマとして探求することで、自分自身や他者の価値観 世界観 人間観などの枠組みに出会ってみよう。

スタッフトークⅡ：「親枠越え1985」

(要点) 自身の子供の結婚を認めていく体験過程での 自分の持っていた枠組みへの気づきを語る。ユーモラスな分かりやすいエピソードと枠論導入。

実習「私が枠を感じた時」

{ねらい} 自分を捕えている枠を探る。

- {方 法} 1. 導入;ねらいと枠の意味を確認する。 (5分)
2. 記入用紙「私が枠を感じた時」資料4を配布し、各自がどんなときに枠を感じたか、箇条書きする。一人になって思い出す。  
(個人記入10分)
3. 自分の記入した枠組みを紹介する。近くの数人で分かち合う。  
(5分)
4. 再び一人になって 自己概念・社会規範として自分はどんな枠を持っているといえるか言語化する。そのために、その日返却の

夏休み課題の作品集「カラフルトーク十人十色」（自分が出会った言葉集）のなかに見る自分の枠組みの特徴を、記入用紙の下欄に記述する。（10分）

5. 最後に その日の原論授業全般のジャーナルを記入して終了する。ジャーナル項目①今日の収穫②わたしの見つけた枠③後期「ひととき」のアイディア④その他自由（5-10分）

#### 10月8日 枠の検討（その1）

「私のワク」～私の枠をアート表現する～

##### 実習「芸術の秋 私のワク」

{ねらい} さまざまな素材を用いて自分にある様々な枠を表現する。また、それを眺め感じて、自身のわく組みの自己検討をする（その1）。

{材 料} クリエイティブ用品： 粘土 セロファン 色画用紙 白紙  
クレヨン 色鉛筆 マジック 水彩 のり セロテープ ホチキスはさみ モール 毛糸 布 色紙 雑誌切り抜きなど。

{方 法} 1. 導入；（10分）

- ・ワク論の自己検討その1として、クリエイティブ用品を用いて自分の枠を実感しながら表現してみる。
  - ・表現は、概念を拡げ、言葉にならないものを表す。各自そのプロセスを味わう。
  - ・実体の解らないものからのスタートとし、何かが表れてくるといいう作り方であり、何かすでに名づけたものを表すのではない。
  - ・作業の間は一人になる。
2. 一人になって静かに造形表現 内省表現に取り組む。(50分)
3. ふりかえりを兼ねた原論ジャーナル用紙記入。

項目：私の「わく」の表現を通して気づいたこと感じたこと等。（10分）

{ふりかえり} ・枠作りのアートは皆集中していた。  
・イメージがだんだん出てくる人が多く、困っている人はいないようだった。  
・自分ひとりになることが確保されていた。前もってのアナウンスが効果的だった。  
・針金毛糸がもっとほしいといわれた。

#### 10月15日 枠の検討（その2）

「私の枠組みを検討する」

～自分の枠そのものの分析・自分との関係性とその枠の裏返し（発想転換）～  
実習「私の枠の検討 ー特性・影響関係・名づけ・裏返し発想転換ー」

{ねらい} 前回の自分のアート表現作品を眺め、自分の枠の言語化をする。  
さらに枠組みの転換、発想転換を試みる。

{方 法} 1. 導入： (5分)

・周りの荷物を片付け 前回のわくアート作品(同教室に展示保管していた)を自分の前におき眺めながら静かに思い出す。

2. 記入用紙「枠の検討」資料5をひとつの枠についてひとつ配布し、説明を受けながら各項目①枠の質②自分との関係③名づけを記入していく。(25分)

注：名づけは、作品のタイトルではなく、そこにシンボル化されている枠組みの名称。

3. 記入したことを分かち合う。(10分)

4. 作品を持って立ち上がり、無言で周りを見回し、いろいろな人に会おうべく、一歩外に踏み出し歩いてみる。自分と似たものや違うものなどに会う。(1分)

5. 普段あまり話さない人と三人組をつくり、紹介しあう。(20分)

6. 枠を裏返してみる：作品を裏返すのではなく、記入用紙「枠の検討」I-②の項目(自分への影響)で丸印した項目の対比的形容項目(ex. 内側にある-外側にある、自分を縛る-自由にする)にひっくり返してもう一度眺めて考えてみる。自分にとって当然となっているその枠組みの特性や影響関係を正反対の側面から眺めてみる。(15分)

7. 記入用紙の余白に各項目について気づいたことを記入する。

8. 項目として枠をひっくり返して変革してみたい枠、そのままにしたい枠など、今後の自分のあり方に関して ふりかえりを兼ねて原論ジャーナルに記入する。(5分)

{ふりかえり} ・ステップを①から順番にステップをゆっくり踏みながらしていくとわかりやすい。

・名づけること 概念化 コンセプトそのものに名前を付けるという概念を扱うトレーニングであるが、不慣れであるため 例などをあげて説明することで解りやすくなった。(ex. 「空」ではなく「宇宙を意識する枠」「オブジェ静物」ではなく「落ち着くことを求める枠」)

・裏返しは オリジナルなプログラムとしてユニークな試みであるが、実感とつながりやすく効果的だった。

・変化を求めない自分や今の自分になる または自分のアイデンティティの確認にもなる。

## 10月22日 枠を越えて

「私の枠超え」～自己の価値転換・行動化へのイメージづくり～

{ねらい} 枠を越えて生きるということについて ともに考え、わく論と生活をつなげた行動イメージのあるまよりの時間とする。

{方 法} 枠超え体験を学生1名と卒業生1名に語ってもらい、感想等記入して2人にフィードバックする。

1. 導入：趣旨説明と二人のゲスト紹介

2. 語り「私の枠超え」社会人入学の学生 元看護婦

原論という一学年合同の学習共同仲間によるスピーチで自身の母親の枠から超えるということについて語る。 (30分)

3. 語り「私の枠超え」人間関係科卒業生

在校生のころから経済的苦労も乗り越えながら、いろいろ発想転換しつつ自己の創造的活動を繰り広げている。ふつうの生活環境の中で何気なく行われている「社会枠から越えた自分」表現の生き方を語る。 (30分)

4. はがき分量のメッセージ用紙 [資料6] を配布して二人へのフィードバックをする。 (10分)

5. 原論ジャーナル記入。 [資料7] (10分)

{ふりかえり} ・反響があった。

- ・在校生の自己告白や個人的思いの表現に対して思いやりを持って聴いている。
- ・卒業生の生き方は刺激的で反響が多かった。
- ・社会的枠組みについての話題は少なかった。今後の課題である。

<考 察> 授業後のわく論のシリーズに関するスタッフミーティングより。

- ・自分の枠の実感を持った。
- ・その検討は難しかったが、自分を形成している世界の質 文化への自覚を促した。
- ・さらに 自分を狭めている通念や思い込みからの解放の可能性や行動につながる目標  
他者理解や他者を見つめる視点の広がりをもてた。
- ・では「わく論」に関する新たな概念形成が learning community としての原論で、何かもたらされただろうか。一スタッフとして以下<考察にかえて>言及してみる。

<考察にかえて>

わく論の展開から創出された「人間関係原論」

ーパラダイム コミュニケーションのすすめー

(まどか庸代) (別記 p.41 参照)

## I. ねらい

後期前半の“わく論”に引き続いた後期後半の原論では、自分を捉える枠からの脱皮すなわち「変化」ということに焦点を当てた。ちょうどこの時期には人間関係トレーニング（Tグループ）の合宿もあり、学生は自分自身の大きな変化を体験する時期でもある。

学生たちは変化ということに対して不安や恐れを抱いていることが多い。ちょうど青年から大人に変わる時期であり様々な外的・内的・環境条件的な変化を経験しているが、それらの変化に対して受け身に身を晒している状況であることが多いことに由来するものかもしれない。

「変化」の問題に光を当てるとき、いくつかの光の当て方が考えられる。例えば、1. 行動の変化、考え方の変化、外面の変化、心の変化、からだの変化など「変化の内容」にはどのようなものがあるかという側面、2. 自分から変えたのか変えさせられたのか、いつのまにか自然に変わっていた、誰かに変えて欲しい、など「主体との関係」はどうなっているかという側面、3. 変化はどのように始まり、どのように変化していくのか、変化の過程で生じることは何か、変化はどのように終るのか、などの「プロセス」に関する側面、4. 変化するということは成長すること、大人になること、学んだということ、あるいはそれらの逆と考えるなど変化をどのように「評価」するかという側面などである。

現実に学生は、自分自身の変化を人間関係科に入学する以前にも、また入学後もたくさん体験してきているし、いまでも体験しつつある。このシリーズでは、その現実の自分自身の変化体験を手がかりにして自分の成長の過程をふりかえり、自分の変化観・成長観を明確にすることを援助することを目指した。

## II. プログラム構成・実施状況

### 1. 「自分の変化論を探る」

10月29日 へんか論①

第一部の変化論①では、まず「変化」をテーマとしてブレインストーミングをおこなうことで、変化論への導入をおこなう。学生は普段の生活の中では“変化とは”ということを考えることはほとんど無いといってよい。このような普段あまり考えることのないテーマに関心を導くために、小グループでのブ



レーンストーミングは有効である。他人からの評価を気にすることなく全員が自分の考えを自由に表現することができるからである。

ブレーンストーミングでウォーミングアップをした後、同じグループのメンバーで話し合っ、これからの変化論の授業で取りあげて欲しいテーマ5つ程度を選んでラベル紙に書いて提出する。授業後のスタッフミーティングでこの時提出されたラベル紙を整理する。(実際にこの時には80枚のラベルが提出された。これをスタッフ4人でトランプKJ方式で整理をおこない、『変化論マップ』を作成した。)

テーマ：「へんかを探るはじめの一步」

ねらい：・「変化」ということについてのイメージを出し合う  
・ 今後の授業で研究したいテーマを出し合う

- 方 法：1. 導入 (10分)
- ・ 季節、化粧、からだの細胞など、日々変化している自分自身を意識してもらおうような例を入れて、これからの数回の授業で「変わる」「成長する」「見方が変わる」とはどういうことか考える『へんか論』に取り組むことを説明。さらに今日のテーマと進め方を説明する。
2. ブレーンストーミング(BS)について説明 (10分)
- ・ プリント **資料8** を配布。グループでBSを進める時の留意点を解説。
3. グルーピング(6人グループ) (5分)
- ・ 入室時に受け取った日程表の裏に書いてある単語が、同じだった人同志でグループを作る。
4. ブレーンストーミング(BS)の実施 (15分)
- ・ 「変化をめぐって思うこと」や「変化のイメージ」などについてグループでBSし、出た意見はすべて模造紙に書き出す。
5. BSの結果についてインタビュー (5分)
6. テーマ選びについて説明 (5分)
- ・ これからの授業で取り組んでみたいテーマを、グループで話し合うように指示。
7. テーマ選び (15分)
- ・ 話し合いの中で出たテーマの中から5つ以内を選び出し、ラベル紙1枚が1テーマになるように書き出す
8. 原論ジャーナル記入 (10分)
- ふりかえり：・ BSを楽しんでいた(遊び的で、お互いに評価されない安心感がある)
- ・ BSのテーマが明確でなかった。しかし逆にいろいろな側面に触

れることができた。

- ・テーマ化は学生にとって切実感が無く、難しかったようだ。早く終わるグループもあった。

### 11月5日 へんか論②

変化論②では、前回提出された80枚のラベル紙をKJ法的に整理して作成した『変化論マップ』を発表し、学生が「変化」というテーマで考えたいことの全体像を提示する。これを見ることによって学生はお互いの持っている「変化」に対する考えの類似性や多様性に気づいたり、素朴に表現されている変化に関する仮説などをシェアできる。

次に、自分の過去の変化の後づけをするために、自分の人生を1本の線で表してみる（「ライフ・ライン」の作成）。「ライフ・ライン」には、自分の人生の節目を記入し、そこでの変化を、見た目の変化、心の変化、夢や理想や考え方の変化、などの観点からマークを入れたり、これまでの人生の中で体験した変化を思い出しながら、クレパスなどを使って自分のライフ・ラインを豊かに表現してみる。

こういう作品作りは学生のイメージを刺激するので、言語化や分析などの抽象化をおこなう前に実施すると効果的である。

テーマ：私のななへんげ 七変化

ねらい：・へんか論①で集めたラベルを整理して作った『変化論マップ』を使って、変化を巡って学生が考えたことの全貌を眺める。

各自が自分のこれまでの人生をライフラインとして描き出し、その上に自分の変化の節目を記入する。

手順：1. 導入、スタッフが整理した『変化論マップ』**資料9**についての解説。（15分）

- ・どのような手順で作ったか。
- ・どのようなことが読み取れるか。
- ・個人机を出して、一人になって作業できる場所作り。

2. A3の白紙に、1本の線で「自分のライフ・ライン」を描く。（15分）

- ・紙面のどこか1点を出発点として1本の線で自分の人生を表す。（やることがイメージしにくい学生のために黒板に例示）
- ・心理的に安心して自分を表現できるように、ライフ・ラインは提出したり他人に見せたりしないことを伝える。

3. ライフ・ラインに、自分にとって変化の節目となった点を入れる。（20分）

- ・節目の種類によって色分けもしてみる。（見た目の変化、心の変

化、夢や理想の変化など)

- ・“今”の時点を定め、時間の区切りなども入れてみる。

4. 受け入れざるを得なかった変化(喪失など)も思い出して書き入れてみる。(10分)

- ・自分の大切な人生を丁寧に掘り起こしながら記入するように励ます。

5. 原論ジャーナル記入 (10分)

ふりかえり: 『変化論マップ』には大変興味を持って、よく見ていた。

- ・学生がラベルを整理したら、スタッフの作ったものとは違うものができただろう。
- ・『変化論マップ』はライフ・ラインを書くのにヒントになった。
- ・個人作業は静かにやっていたが、20分を過ぎるとおしゃべりする人たちが出てきた。
- ・自分史の授業を取りたくなったという学生がいた。
- ・節目の種類を示したので具体的にわかりやすくなった。
- ・ライフ・ラインは推薦入学でもやったので、書きやすい人もいた。

### 11月19日 へんか論③

変化論③はTグループ合宿直後の授業であり、半数以上の学生が何らかの形で対人関係の中での変化成長を体験していると考えられる。しかし参加しなかった学生には理解困難な状況であるので、授業ではTグループ体験については取り扱わないこととした。

ここでは変化論②で作成した『ライフ・ライン』と『変化論マップ』を利用して、各自が自分の成長の過程で体験した変化をじっくり考え、『私の変化論』へと考察を深めていくことを援助することを目指した。

プログラムとしては、変化の領域(外見、心、夢や理想)毎に、いつ・どのように変化したかを具体的に書き出し、そこに表れている自分自身の特徴や傾向をていねいに発見するための時間を持つ。この作業は全く個人作業でおこない、授業時間の最後に『私にとって変化とは(気づいたことのメモ)』と題して自分の変化論に関するまとめを作成する。

テーマ: 私の七変化を顧みる

ねらい: ・自分の体験してきたさまざまな領域での変化を具体的に書き出し、そこに見られる自分の特徴や傾向を分析する。

- ・各自が考える『変化論~私にとって変化とは~』をまとめる。

方法: 1. 導入 (15分)

- ・一人になってゆっくり考える時間であることを伝える。
- ・個人机を使って学生番号順に座る。(仲間同士のおしゃべりの発

生を防ぐため)

2. 記入用紙『私の七変化を顧みる』**資料10**を配布し、記入の仕方を説明する。(3分)

- ・まず、変化の領域ごとに、いつ、どのように変化したかを記入する。
- ・次に、変化の諸相に見られる自分の特徴や傾向を考察する。
- ・自分のペースでじっくり考えながら記入すること。

3. 個人で記入。(30分)

4. 「私にとって変化とは」欄の記入。(10分)

- ・今の時点での気づきをメモする。
- ・変化の諸相の記入が終わってから記入すること。

5. 「私にとって変化とは」欄の分かち合い。(5分)

- ・奇数列の人はその場で後ろ向きになり、向かい合った偶数列の人と、ここまで記入してくる中で気づいたことの分かち合いをする。(具体的な出来事は話さなくてもよい)

6. 原論ジャーナル記入(10分)

- ふりかえり:
- ・機械的な配列で座ってもらわざるをえなかったのはさびしいが、静かに集中することができた。
  - ・座り方を指定する理由を丁寧に伝えたのでよかった。
  - ・一人での作業が新鮮だった。
  - ・最後の分かち合いから得るものがあった。
  - ・変化を考えるのに少し疲れてきているようだ。

## 2. 「さまざまな変化論を聴く」

学生自身が変化の問題を考えていく時に、自分の体験に基づく考察だけでは行き詰まるので、変化論④と⑤は、四人のスタッフがそれぞれの専門領域から変化という問題に光を当てた小講義をおこなう。これによって変化に関連する学問的な概念を提供すると同時に、学生自身が『私の変化論』をさらに深めることができるようなヒントを提供する。

11月26日 へんか論④

テーマ: 視点を変える PART 1

ねらい: 変化・成長についての考えをまとめていくときに役立つように、スタッフの視点から話をする。

方法: 1. 導入(5分)

2. 社会学的視点から(25分)

3. 人間学的視点から(15分)

4. 原論ジャーナル記入 (10分)

- ふりかえり：・講義形式が新鮮だった。
- ・相互作用理論、役割理論、発達課題理論など社会学の概念を使って変化成長を説明した。
  - ・フィールドワークの例がわかりやすかった。
  - ・「変である」ことは「良い」ことである、という視点が刺激的だった。

12月3日 へんか論⑤

テーマ：視点をかえる PART 2

ねらい：変化・成長についての考えをまとめていくときに役立つように、スタッフの視点から話をする。

- 方法：1. 導入 (5分)
2. 哲学的視点から (30分)
3. 心理学的視点から (25分)
4. 原論ジャーナル記入 (10分)

- ふりかえり：・静かに集中して聴いていた。
- ・哲学的な視点への興味、反応があった。
  - ・心の力学の視点や「らしさ」は変化を妨げるという視点が興味深かった。

### Ⅲ. 考 察

「変化」や「成長」という問題の体験学習化はなかなか困難で、今回の一連の授業は「思索を深める」体験学習の試みであったといえる。思索を深める体験ということは、哲学するということであって、具体的な変化や成長の体験ではないが、既存の概念をただ単に提供されるよりもはるかに主体的で参加型の学習になることは明らかである。

このような授業作りにとって、今回の一連の授業の中で試みた1. イメージを巡っての“ブレインストーミング”、2. ライフ・ラインのような視覚的な“作品として表現する”こと、3. 一人で思索して“言語化する”こと、4. 小講義などで“新しい視点に触れる”ことなどは重要な要素であると考えられる。

(山口真人)

## 「共に集う場」作り、そして一年間のまとめ

### I. ねらい

人間関係は究極的に言えば「共に生きる」体験そのものであり、人間関係原論はその「共に生きる」体験の中から生み出されてくるものでありたいと願っている。このような学習を可能にする風土を「ラーニング・コミュニティ（学習共同体）」と呼び習わして、この風土作りも学習の要素として組み込んでいく。具体的に人間関係原論では、シーズン毎に学年全員が「共に集う場」を作る活動を学生がスタッフとなって担当することを通してトレーニングを行っている。さらには、2年間の原論の中で数回体験するこの種のコミュニティ作りの体験を、最終的には「学生の手による卒業時合宿作り活動（人間関係トレーニングB）」へと高めていくことをねらっている。

1年の最後つまり年末には、クリスマスというミッション系大学にとっては重要な日がある。これを学生の「共に集う場（クリスマスパーティ）作りへの活動」として活用するため、今回の原論は、「へんか論」と平行させて、3週間前からプログラムを組んだ。

### II. プログラムの構成・実施状況

#### 1. 11月26日（金）11：45～12：00

ねらい：クリスマスパーティへの雰囲気作り

当日の「へんか論」の授業が一段落したところから15分の時間を取って、クリスマスパーティとアドベントカレンダーのことを教員よりアナウンスし、さらに、ジャーナルの「クリスマスパーティでやってみたいこと」欄に記入することから始めて、少しずつ導入していく。

アナウンス内容：

- ・12月17日を人間関係原論Ⅰは学生企画のクリスマスパーティとし、クリスマスと共に飲む集いとする。学生スタッフを来週募集する。
- ・クリスマスは飲むの日、それまで4週間は待降節（アドベント）。人間関係原論としては、自分の飲むを発見し、他の人と分かち合う日々としたい。そのために、教員を含む全員が『アドベントカレンダー』を作って持ち寄り、他の人と交換し、クリスマスの日まで、その人からもらったカレンダーを楽しむ。

・カレンダーは12月3日（金）の人間関係原論で他の人のものと交換するので、3日から25日まで毎日開くことのできる窓を作り、その中に「私にとっての喜びのもと」あるいは「私からあなたへのプレゼント」としたいものを絵や文字で書き込むこと。見本として市販のアドベントカレンダーを見せて、イメージ作りをした。

ふりかえり：

- ・多くの学生はアドベントカレンダーというものを初めて見たようで、興味を持っていた。
- ・学生の中にはカレンダー作りに気の進まない人もいたが、特に反対の声はなかった。

2. 12月3日（金）10：40～10：50

11：45～12：15

ねらい：アドベントカードの交換と学生スタッフの募集

授業のはじめの10分間の「ひととき」の時間に、スタッフの一人が自分のアドベント体験を紹介し、クリスマスにちなむ音楽（グレゴリアンチャント）を聴いた。

授業の最後の30分を使って、アドベントカレンダーの交換を行い、学生スタッフの募集を行う。

実施状況：

まず、アドベントカレンダーの交換方法について学生の意見を訊くことから始めた。学生からは様々な意見が出て意見が集約しにくくなったので、教員が提案し、教室の中を歩きながら3回の交換をして手元に残ったものを自分のものとするというルールで交換を行った。今回作って来ることや持ってくるのを忘れた人は来週交換することとした。

その後で17日のパーティの企画する学生スタッフを募集した。4名が名乗り出たところで一応その場での募集をやめて、今後スタッフ希望者はスタッフミーティングに参加することで加わっていくことにした。

授業の最後のジャーナルと一緒に「クリスマススタッフへのひと言」として、提案や希望やメッセージをB6用紙に自由に書いて提出してもらった。授業後、学生スタッフと最初のスタッフミーティングを行った。

ふりかえり：

- ・アドベントカレンダーの交換に関しては、自分で飾りたいので交換したくないという意見や、仲間同士で交換したいという意見など、活発な意見交換が起こった。

- ・教員スタッフの提案意図を説明して、決着をつけさせてもらった。
- ・学生スタッフには4名が名乗りを上げた。
- ・スタッフミーティングでは提出してもらった「ひと言」を読み、10日と17日のスケジュール作りを始めた。

### 3. 12月10日(金) 10:40~12:10

ねらい:「クリスマスパーティ」の準備

3日に行われた学生スタッフと教員スタッフの合同スタッフミーティングで決めた計画に基づいて、パーティの準備が進める。授業の進行は学生スタッフが責任を持って行う。

実施状況:

授業最初に「ひととき」として、雰囲気を作るためとクリスマスに対する理解を深めるねらいで、キャンドルサービスと音楽と聖書朗読を行った。その後学生スタッフが全員の前に立ち、学生全員でパーティ準備をするために、パーティで出し物をする人たちは出し物の準備をし、その他の人たちは会場の飾り付けなどの作業を分担するように指示して準備を行った。

学生スタッフと教員スタッフは授業後、パーティ実施のためのスタッフミーティングを開いて、この日の状況をふりかえり、17日のプログラムと司会進行などの担当を決めた。

ふりかえり:

- ・学生が意欲的に役割をとって準備活動を行っていた。
- ・たくさんの人が出し物で参加する準備をしており、主体的に関わる学生が多いという印象。
- ・学生スタッフにも新たに2名が加わった。

### 4. 12月17日(金) 10:40~12:10

ねらい:「クリスマスパーティ」の実施

学生の企画進行によるクリスマスパーティを実施した。会場はクリスマスツリーが飾り付けられ、教室内の装飾も楽しい雰囲気を作っていた。

学生の司会によって有志が次々に舞台に立って、それぞれの持ち味を披露し、楽しんだ。出演者とスタッフを合わせると、約半数の学生がクリスマスパーティの作り手として関わった。主なプログラムは下記のものであった。

1. 仮装グループによるコント
2. ピアノ演奏
3. グループによる歌の発表
4. ダンスパフォーマンス



5. グループによる合唱の発表
6. 全員参加によるゲーム
7. アドベントカレンダーを交換した人へのメッセージカード作り
8. プレゼント交換
9. ジャーナル記入

ふりかえり：

- ・いつもより若干欠席者が多かった。
- ・参加学生たちは意欲的にパーティに参加し、楽しんでた。
- ・学生スタッフにもジャーナルを読んでもらう。

5. 1月14日(金) 10:40～12:10

ねらい：人間関係原論Ⅰ後期のまとめをする。

手順：

ステップ1. 9月から行った後期の授業の全日程表を配布し、半年間の授業での体験をふりかえる。全日程表には各回毎の授業日とテーマを印刷してあり、学生は自分のファイルを見ながら、各回の授業の、自分にとっての意味、重要な気づきや体験などをメモする。

ステップ2. 次にステップ1で作った資料を見ながら、人間関係原論で取り扱ってきたテーマについての自分の学びをレポートする。B4用紙1枚に1.「わく論」をやって、2.「へんか論」をやって、3.「クリスマスパーティ」をやって、の3つのテーマでレポートを作成し、提出する。

ステップ3. 春休みの宿題として、一年間の人間関係科での様々な授業を自分自身の学びとして統合しながら、自分の本『ニンカン知恵蔵』を制作する。資料11

ふりかえり：

- ・テーブル付きの椅子に一人で座ったので静かであった。
- ・しっかりとふりかえりながらレポートを作成していた。
- ・新学期に提出された『ニンカン知恵蔵』はそれぞれよく工夫され、装飾されたものが多く、学生が楽しみながら取り組んだことが伝わってきた。

### Ⅲ. 考 察

授業の場は、学生の主体的な活動を生み出すには、困難な問題を含んでいる。授業は教師主導の場であるという考え方があり学生の中にもあり、主人公は自

分であるという確信がなかなか持てないのである。本当に自分たちがやっているのか?、どこまでのことが許されるのか?、やることが勉強になるのか?、自分なんかやってもいいのだろうか?、自分がやらなくても誰かがやるだろう、などの疑問や不安が学生の頭をよぎるようである。これらの不安や疑問を解消していく過程が学習でもあり、ファシリテーターとしての教師の働き所でもある。

一方、教師の側も同じで、学生主導のはずが、いつのまにか教師主導に陥っていることに愕然とすることもある。

今回配慮した点は、原論としての授業と平行して活動が導入されるため、動機づけをゆるやかに行うように心がけた。特に授業の始めの「ひととき」の時間の利用は有効であったと思う。また、学生がエネルギーを傾けた活動を一年間の学習内容の中にきちんと位置づける(レポートの項目にした)ことも大切である。最後に、スタッフミーティングを含めて、学生の主体性を確保しつつ、学生の創造性を刺激するような介入を教師自身がトレーニングしていかなければいけないことを痛感している。

(山口真人)

## 原論Ⅱ Aブロック 出会い、かかわり から 愛 共生へ かかわる論

### I. ねらい

これまで一年間、学生たちは人間関係原論を通して、様々なことを考え、討論し、そうしたことを実生活を通して身をもって体験してきた（例えば、「とも論」「わく論」「変化論」など）が、まだ「関係論」には直接触れてこなかった。つまり「かかわるとはどういうことであるのか、とか、関係の諸相や関係の中で実際はどんなことが起こっているのか」といったことにはまだ目が行き届いていなかった。しかし人関での関わりの様々な面は身についてきた。例えば、積極的に人と関わる姿勢（自分の描いたものを自然に人に見せることができる、等）、信頼の様子を示す姿勢、などが身についた。主体性を重んじる人関では、積極的に、また主体的に人と関わることもっとも大切な目標である。そこで2年生にもなったので、この機会に直接、「関係・かかわり」に目を向けようということになった。そしてもし関係の原理にまで進むことが出来れば、卒業後の社会での生活に向けて、学生たちに何らかの示唆が与えられるのではないとも考えた。このことは必然的に、12月にある「卒業合宿」での経験が大きな糧になるであろうと予測される。

そして手始めに「かかわり」を取り上げ、同時に2年次は、「人関の文化を生きる」を大テーマとしていくことがスタッフ間で了承された。

以上のような目的を達成するために、以下のような「実習」が考案され、実施された。その流れは大略以下のようなものである。実習はまず一年間の決意を新たにすることから始め、次いで、「かかわる」とは何か正面から目を向け、その結果をKJ法を用いてスタッフが「かかわり論マップ」を製作。そこから学生は自らの「かかわり体験」をもとにして、様々なかかわりの万華鏡を作ってみる。その後映画を見て、その中でのかかわりに注目し、客観的にかかわりを見つめていき、かかわりの様々な形を認識していく。次にさらに抽象的に考えを押し進めて自分の「かかわり論モデル」を製作（三次元空間を想定）。そこからかかわりの「〇〇性」といったもの（かかわりの抽象化）を引き出す試みをする。その後、かかわりの哲学的意味を講義し、実際に学生がまだよく知らない人と話し合う機会をもつ。時期的に初夏になったので、夏を祝う祭りをした後、これから自分がこの人間関係科でどれだけステップアップしていくかを全員の前で語る。

流れは以上のようなものであるが、それを以下順次もう少し詳しくたどっていこう。

## II. プログラム構成・実施状況

4月16日

まず2年生の授業を始めるに当たり、「私の窓」を作って、この一年の決意を新たにすることにした。窓は以下の5つである。

- ①人関の1年間でやり残したこと。
- ②期待している授業3つ
- ③今年1年チャレンジしたいこと（こんな人になりたい、も含む）
- ④伸ばしたい能力
- ⑤今年の私のシンボルマーク

この実習については、①学生は始めはなかなかスタートしにくかったようだ、次第に集中していった②シェアしないということから、内容が書きやすかったようだった、という振り返りがあった。

4月30日 「かかわるってなぁに」

### 実習 かかわる論の開拓

真正面から「かかわる」とは何かを取り上げていく。

方法としては、ブレインストーミングを用いて「関わる論」の開拓をする（ブレインストーミングのルールを提示）。

1. まず5～6人で一つのグループを作り、「関わることをめぐって日頃考えていること」、「わたしにとって関わるってこんなことだ」というものをどんどん出していく（因みに最高47項目出たグループがあった）。
2. これまで出てきた項目を参考にして研究したいテーマを選び出す。  
各チームに三枚カードを配り、特に原論で研究していきたいテーマを書き出していくことを指示する。例えば、「○○が△△である」とか、「どうして○はXXなのだろうか」という疑問形でもよいことを説明する。

その後のスタッフミーティングでは、まだかかわることに恐さをもっている学生がいる、という指摘があった。

その後、ブレインストーミングで出た各チーム3枚のカードを集め、スタッフ4人でトランプ方式のKJ法を行う。

5月7日 「わたしのかわり体験」

スタッフが先回の学生のカードから、KJ法で「かわり論マップ」（土壌から生えてくる花のイメージで作製）資料12を作ったのを示す。その内容として、

- 1) 土壌としてのかかわり
- 2) かわりの育っていくプロセス

- 3) 勇気と冒険で生み出され、のばされていく(コミュニケーション)
- 4) 究極の花の部分がかかわるの定義のようなものであったことを説明。

#### 実習「かかわり万華鏡」作り

{ねらい} 自分の様々なかかわりをながめてみる

{材 料} 画用紙 クレヨン 鉛筆など

学生への指示は次のようにしてなされた。

目をつぶってかかわり論マップを思い出す。また自分の日常体験をも思い浮かべる。するとそうしたものは、色々な現れ方をするはずである。このような様々な体験、その時の気持ち、万華鏡を覗くように見えてくるだろう。そのようにして見えてきたものを、今はモノクロで、骨格だけを描く(色つけは家へ帰ってからでよい)。

また、今、自分の関わりの中で強烈に残っている関わりを思い出してみる。その人との関わりを色で表すと何色か、その人との関わりでの触覚はどんなか、その人との関わりでの味はどんなか、等を考えてみる(それがペットでも、同じ人が何人出てきてもよい。グループでもよい。ただし感覚を表すことばを豊かに用いること。そうするとそれらが花火や星のように拡がってつながっていくことだろう。この実習は、感覚をフルに動員してやり、日常生活でのかかわりを味わってみることである)。

その後のスタッフミーティングでの意見は次のようだった。学生の意見として、たのしい、静かにやれたというものから、相手の立場にも立ってみたい、触覚は難しかった、人とシェアしたくない、むつかしかった、というものも多かった。また学生の実習状況を見ていると、学生の語彙が少ないのに気づいた。しかし学生自身心の中で気づいていることは多い、という結論になった。

#### 5月14日「勇気あるかかわり」

映画「ネル」を観る。

授業では、これまでの自分を見つめてきたが、概念的な思考をするにはまだ早いかもしれないと考え、映像でかかわりを描いたものを探し、それを観ようということになった。そうしたもののうち「勇気あるかかわり」を描いたものとして、映画『ネル』を選んだ。但し観た後の感想としては、かならずしも「勇気あるかかわり」に直接はむすびつかない、ということであった。

この映画の粗筋は次のようである。

ある山奥に人々との接触を避けて暮らしていた一人の女性が亡くなったが、そこには彼女の娘がいることが発見された。この発見に立ち会った男性の医者は、この娘が人と交流できないことを知り、町の大学病院の精神科に相談を持

ち込む。その担当となった女医はもともと教授になろうという野心をもっていたが、この問題に直面して医学的にこれを解決しようと意欲を燃やす。どちらかと言えば、男性の医者は直接人間に接した上で、医学的処置をしようとするので、娘に向かう態度をめぐってしばしば二人の間には諍いが生じる。その上、これから先の娘の処置をめぐって裁判にまで発展し、二人は、どちらの主張が正しいか、それを一定期間の間に証明しあうことになる。この調査の間に、娘が独特の言葉（基本的には英語）をしゃべっているということがわかり、その解明に向けて互いに努力しているうちに、徐々に二人の間には理解が生まれ、ふたりして娘を普通の社会に触れさせてみるが、結果的に、様々な問題を引き起こす。裁判の終わりで、娘は自分は自分であると宣言して、最終的には、娘はもとの山で、ある意味で自立して暮らす道を選ぶ。他方、二人の医者の上に愛がめげえ、結ばれる。

#### 5月21日 「ネルとかかわる人々」

今回は先回の映画をもう一度40分程度（ネルへのジェイ [男性の医者]、ポー（ポーラ） [女医] の関わりに変化が起ってくる辺りまで）観て、ネルと様々な人とかかわりを見ていくことにした。まずVTRを見ながら、登場人物の色々なかわり方をメモする（B5メモ用紙、各自3枚づつ）。このメモは資料13のように、「場面」と「出来事・会話など」および「コメント」の欄に分かれている。それにVTRを見たとき、気づいたことを書き入れる。後、グループ（前後ろの人、二人くらい）で分かち合う。学生の中から5人くらいに、分かち合いの報告をしてもらう。以下その要旨である。

- 1) ジェイが自分の子供時代を話すことで、ネルも心を開き始めた。
- 2) ポーが「言葉が通じない」と言うと、ジェイは「それなら誰かが習えばいい」という場面が印象的。実験のようにネルにかかわるポー自身はジェイのかかわり方に影響されて、変化していく。
- 3) ネルの収容に関して。  
「ネルが本当に望んでいるのか？」と質問するジェイは、ネルを一人の人間として見ている。ポーは患者としてネルを見ている。
- 4) かかわるということに関して。  
どこまで踏み込んでいくかの境界。「一人で生きていく」ことの境界。人が人を必要としているから一人で生きていけないのか。人はどんな形で必要としていくのか。
- 5) ジェイとポーはネルに対して、どちらもネルのためにという気持ちは同じだが、かわり方が異なる。ジェイは直接的かわりで、自分の目で言葉も理解しようとする。ポーは間接的かわりで、観察・分析データを手がかりとする。

## 5月28日「ジェイ性、ポーラ性、ネル性を探る」

今回は、「ジェイのネルへのかかわり方を生み出している人間観・かかわり方」および「ポーラのネルへのかかわり方を生み出している人間観・かかわり方」、つまり二人の生き方・価値観を探ることにする。即ち、二人とも同じように医者ではあるが、ネルへの関わり方には相違がある。この二人の違いを明らかにするために、ネルの言葉に気づいていくときのジェイ、ポーラのアプローチの仕方を探っていく。

以下の四つの項目でそれを考えていく。

- 1) 裁判所で戦った時までに、明らかになったジェイとポーラの価値観の違いは？
- 2) ネルとのかかわりの中でジェイとポーラが大切にしていたものは何か？
- 3) ネルはどのようなかかわりの世界に生きているのか？
- 4) かかわりにおけるジェイ性、ポーラ性、ネル性とは？

以上のことを話し合うため、グループに分け、「こんにゃく談義」と称して行う（グループ分けは、ジャーナルの裏に「初夏」にまつわる言葉を書いて、同じ言葉同士がグループを作る）。「こんにゃく談義」というのは、あるテーマをめぐって、くつろいだ感じで、よもやま話のように、語りあえばいいのではないか、と考えて命名したものである。

後でのインタビューで出た意見は次のようなものであった。

- 1) については、二人とも医者だが、一方はホームドクターであり、地域の人々、人間の中に入っていて、自然である。他方は大学病院の医者、実験、研究（地位や名誉を求める）、病人は教材・材料となる。
- 2) では、ネルの様子をTVで見るポーラ、望遠鏡で見るジェイ。どちらもありのままの姿である。そこからだんだんと、外から見のではなく、内に、家の中に入ってみたいという気持ちの変化があり、それがかかわりたいというふうに変っていった。ポーラは自分の影響を与えないようにする。ジェイは自分が影響し、直接かかわっていく。
- 3) 空想の世界ではなく、ネルにとっては現実の世界。メイ（亡くなったネルの妹）の存在が強い。聖書、神、守護の天使などという言葉が目立つ。人とかかわりが少ないが寂しいという気持ちはない。自然とも、神とも、メイとも現実に生きている。ネル自身、風や大気になっていく。
- 4) の質問では、スタッフの意図は、映画から離れて男性、女性というように、そのものの本質や本性を考えていくことにあったが、学生にとってはなかなか難しいものだった。

### 6月11日 「わたしのかかわる論モデルを作る」

今回は、やや抽象的思考（つまり理論的枠組みを作って）をして、まず自分の「かかわる論モデル」を作り、かかわり観、関係観の理解を深めていこうと考えた。

1. まず3次元空間を想定して、三つの座標軸を作る。それぞれをジェイ軸、ポーラ軸、ネル軸とする。
2. 「かかわりの三次元モデル」（①、②、③の三つの三次元空間が描かれている）のプリント **資料14** を配る。
3. まず①に三つの軸にJ、P、Nの三人の特性を表す点をプロットする。
4. 紙の横に自分の考えたそれぞれの軸の特性を言葉で書く（そうすれば各人のJ、P、N理論ができるはず）。
5. 出来た人は近くの人と分かち合う。
6. ②では、先にプロットしたところに自分で関係を抽象化して名前をつける（例えば、ネルは魂性、ジェイは心理性というふうに）。この場合、あえて名前を付けてみるのが大切である。
7. 学生にインタビューする。答えには「直接性」「科学性」「自然性」「表現性」「他人ごと性」などがあつた。
8. 次に自分だったら何性になるかを考えてみる。
9. ③に究極の三つの軸名を記入し。
10. 自分にとってのかかわり論を書く。そのかかわり論の中で自分をプロットする。
11. ここで書いた軸についてはジャーナルに書く。
12. ミニレクチャー「関わるの哲学」 **資料15**

### 6月18日 「我と汝、わたしと…」

学生同士の新しい出会いを試み、じっくりと語り合うために、実習「ひとときの対話」を行う。

次回「夏至祭」のアナウンス。

### 6月25日 「夏至祭」

学生によるプログラム。

### 7月2日 「私のステップアップ人関」

私のステップアップ人関を一人一人（何人かが一つのグループになって前に出る）が全員の前で、一分間の持ち時間の中に語り、それをVTRに撮る。

学生は、これから残りの半年をどのようなことを目標に過ごしていきたいかを語った。それぞれが自分の状況の中で、是非やってみたいことを話していた。



時間的には予想していたよりも早く終了した。学生がスムーズに動いたことと、話す時間がそれほど長くなかったせいであろう。

また最後に一人一人の重み、存在を味わい、シンボルとするためヒューマンチェアをする。

#### 7月9日「前期のまとめ」

全日程表「資料16」に書き入れて、自分の前期での学びを確認する。

『私のかかわる論』～私のニンカンでの体験を素材にして～という題で、レポートを作成。夏休みの宿題として、「あいのことは集つくり」資料17を提示。

(大森正樹)

## 原論Ⅱ Bブロック 出会い、かかわり から 愛 共生へ あい論

### I. ねらい

26期生の人間関係原論は1年次においては「これまでの文化から新しい文化を創造する」ことを目標としていた。2年次においては「ステップ・アップにんかん、人関の文化を生きる」のテーマのもとに、前期は「かかわる論」にせまった。後期は10月の最後の週から、学生達にとって卒業前の最後の合宿授業となる人間関係トレーニングBの学内授業が予定されてくるため、原論Ⅱに使うことのできる回数は9月末から10月にかけての5回と限られてくることになった。その限られた授業で人間関係科での学びを深め、私が私であることを大切にしながら、共にあるための原理として「愛、出会い、いのち」を考えることをねらいとした。それは言葉を換えるならば関わり合いの成果、実りとして、人関という場での共にあることを味わいながらでてくる共感的理解を深めることに他ならない。

そのために、「愛」という言葉からでなく、人関での出会いで培われた実際の関わりの実りの質に迫ることを試み、その試みが次に来る人間関係トレーニングBで学生達が自分達の手で作りに上げる合宿授業へとつなげられるよう方向づけをしようとした。

「関わりから共生へ、共にあることへ」という人間関係日常生活において頻繁に使われているが、私達はその意味を深く考えることなく使っていることが多いが、この時期には関わりから共生へ、ともにあることへとつなげる「愛」

をできるだけ体験的に理解し、自分なりの「愛」論を作ることをねらって授業を組立てた。

## Ⅱ. プログラム構成・実施状況

9月24日 テーマ 一きかせてよ 愛のことば一

### ①「わたしのあいのことば集」のわかちあい (60分)

学生達は「あいのことば集づくり」が夏休みの課題であった。それまでの自分自身の出会いの中で、ドラマから、読書から、身近な人や見知らぬ人のことば等から心に残った愛のことばを書きとめて、ブックレットに仕上げるというものであった。その作品は夏休み後の最初の授業に持ってくるように指示してあったので、それらを教室のあちこちに展示することから授業をはじめた。

この時期、学生達は夏休み後の再会で落ち着かない雰囲気だったが、いつも一緒にいる仲間とわかれて教室内を歩き回り、いつもと違う人や自分が興味ある人と3～4人でグループを作った。そして、その新しいグループで「愛のことば集」をシェアした。そのあと、シェアして気づいたことを個人でメモし、5～6人の学生に個人メモを発表してもらい、全体でのシェアとした。

### ②クラスの他のメンバーが作成した「わたしのあいのことば集」を一通り見た後は、自分の作品に書かれたものから愛のパライティニーに目を向けるために愛の言葉の特徴・種類、また自分の作品や愛の捉え方の傾向などを探った。

自分達の集めてきた「愛」の中で、どんなテーマに取り組みたいかを話し合いながらグループでB4の白紙にブレンストーミング風書き出した。

### ③その後、各グループから二つずつ追及してみたいテーマ、話し合ってみようテーマを、八つ切り画用紙半裁の短冊に単語でなく、疑問文の形で書き出してもらった。

### ④取り上げてみたい愛のテーマを、クラス全体でまとめるため、まず親札になるものを黒板にだし、それに似た短冊を持ったグループが次々に出してゆくという方法をとった。

### ⑤黒板に張り出されたものを全員で概観したあと、その出されたテーマをふまえながら、これから3回の授業が組み立てられていくことが告げられた。出された愛のテーマは23の群になった。

10月1日 テーマ 愛の定義づくり

学生達の自主的な動きを尊重しながら、これまであまりグループになったこ

とのない人と約5人のグループをつくってもらい、以下のステップに従って、個人作業、グループ作業を交互にいれながら進められた。記入用紙を準備する。

①ステップⅠ 愛だと思う例をあげる（まず誰もが愛だと認める愛を列挙する。ついで愛とまぎらわしいと自分が思う例を列挙する）。そしてそれらに共通する特徴から、愛の定義を作る。まず、個人で具体例をいくつか用紙の裏に書き出した後で、グループの定義をつくる。

②ステップⅡ この定義をもとにして、まぎらわしい愛を愛の定義から排除できるかを吟味する（自分たちの定義の確かさを確認すること）。この吟味では、状況や持続性などを、ステップⅠで用紙の裏に書いた実例を考慮しながら吟味する。

ステップⅢ ステップⅡをやって、愛の定義を修正しなければならなくなれば、それを修正あるいは再定義する。

このソクラテス風ドクサの作業を皆でしたあと、各グループが自分達の愛の定義を発表した。

最後に出された愛の定義はグループにより様々であったが、どのグループも愛について自分の生々しい経験や、家族に対する気持ちなどを整理しながら色々考えられ、話し合われてよかった。各グループから出された愛の定義は一覧表

**資料18**にして学生に配布した。

#### 10月8日 愛の人間論

前回とこの回の授業に先立つ“ひととき”の時間には、夏休み中に学生達が作成した「あいのことば集」からいくつかのものを、OHPで投射して鑑賞した。

この日は、「人間を通して現れる愛」ということで、5つのテーマで4人の教員スタッフが入れ替わり立ち代わり約15～20分話をし、その後、配布された個人用メモ用紙にメモ、メモをもとにグループを替えて話し合うことをした。

取り上げられたテーマは、前回の定義と関連づけながら次のようであった。

- ①愛の生まれる時・死ぬ時
- ②愛のチャンネル
- ③愛の排他性・専一性
- ④愛の規範
- ⑤愛の変容

#### 10月15日 わたしの愛のエネルギー

①2回ほど続いた話し合い中心の授業に変化をつけるため、また、学生がエネルギーを出しながら、愛のエネルギーを感じとるため、造形的な作業を

とりいれた。ブロンズ・はにわ・緑・グレイ・白の色別粘土で「愛のエネルギー」と題する作品を作った。作品は一応出来上がった時点で他の人の作品を見てまわる時間をとった。

- ②出来上がった作品を、自分が選んだ色画用紙の上におき、「エネルギーの展開図」をクレヨン、色鉛筆などで描いた。展開図では愛のエネルギーの対象、関わり、受けているものなどを対人関係図のように描いた。
- ③出来上がった作品を見ながら配布された記入用紙に個人メモをした。

### 10月22日 とも論からあい論へ、そして共に生きるへ

- ①原論でしてきたことの流れ — 2年間の授業の流れの一覧表をみながら思い起した。
- ②人間関係科での2年間の生活の中での実感や体験を、配布された表 **資料19** に、とも論からあい論までの学びとつなげて書き出してみる。5つのテーマが2年間のそれぞれの時期にどうであったか、自分の中の変化を辿ることができるかどうかなどを考察した。
- ③〈「ともに生きるために」残りの時間をどのように過ごすか〉を記入用紙 **資料20** に個人で記入した
- ④学生達が自分達で作上げていく人間関係トレーニングBのスターティング・スタッフを募集した。12名の学生が応募した。

(伊藤雅子)

## おわりに

「今を共により深く生きる」ということは、人間関係科では様々な場面で、くりかえし授業や合宿の「ねらい」となり、言葉としての表現は少しずつ異なっても繰り返しひきあいにだされてきた。今回、授業実践報告としてまとめられた1998年度、1999年度の人間関係原論Ⅰ、Ⅱにおいても 1年生のⅠでは「これまでの文化から新しい文化を創造する」、2年生のⅡでは「人関文化をいきる」として、人間関係科がねらいとする「出会い、かかわり から 愛 共生へ」ということを、体験的により深く学生に伝えようとした。

具体的な授業の展開も5つの論として示されたブロックごとに、アプローチの方法に変化を持たせながら計画・実施するように工夫された。人間関係科では同じ目標にむけて協力する教員、教員と学生、学生同志が「共にあること」、「共に生きる」とはどういうことかを体験的に学び、一人一人の中で自分の生

き方と統合していくことを目標としているが、今期の原論も行き着くところは「共生へ」であった。原論授業の最後のテーマが「愛」であったことも、愛から「共にあること」へとつないでいくという意図があったからに他ならない。

この「共にあること」は2年生全員が必修科目として参加しなければならない人間関係トレーニングB、卒業時合宿のねらいへとつなげられた。この合宿は教員にとっても学生にとっても2年間の学習の成果が問われることとなり、ある種の緊張感をもってむかえられた。ここでその合宿の詳細を述べることは出来ないが、「これぞ26期生！！自分らしくある 今 この一瞬 ～私と私・私とあなた・私とみんな～」というモットーのもとに、学生全員がそれぞれ、自分なりに全力を出し切った合宿であったように思われる。このモットー自体も企画グループの学生達が2年生全員からの意見を集め、その集められたものを手直ししながら全員で作上げたものだった。「共にあること」そのものをとりあげて個人で考えたり、議論したりということは全くなかったが、原論Ⅱの最終レポート作成の時点でふりかえて、各自の体験を言語化してもらった。レポートの課題は次のようなものである。

- 1) 「ともに生きる」(人トレB体験を通して考えたことなど)
- 2) 「私の旅立ち」(最終授業で卒業を前にして学びを旅行に持って行く物にシンボライズして旅立ちのための荷造りをして、鞆につめてみるという実習をしたが、その中味をふまえて、2年間の学びをまとめる)

「共にあること」については、人トレBの合宿期間中、随所に2年間同じ学年に居ながら話をしたことのない学生同志が親しく語り合っていたり、皆の前に出て発言したり、リーダーシップをとることのなかった学生が前に立って自分の考えを述べていたりということが起こっていた。そして、他の学生もそれに気づき暖かくサポートするといったようことがみられた。このようなことは、学年毎の雰囲気や特徴はあるとしても、同じ期の学生が2年間通して共に助け合い、サポートしあい、そこから学び合った成果も大きいと思われる。この2年間の人間関係原論の授業はそれぞれのブロックで学生達はその時に関心のあるところからテーマとのつながりを模索し、それをどのように共通の理解に近づけ、深めたらよいかを4人の教員がねりあげながらすすめられた。そして、授業の中で提示されたことは学生一人一人がそれぞれのやり方で自分の中に取り入れて行ったようである。

Uさんのレポートから引用してみよう。

人関(原論)での2年間をふりかえてみて、1つ1つの項目のなかにも学生が入りこみやすいようにならず最初は過去の経験をふりかえることから始めていたことに気づいた。内容的にブレーストーミングだったり、休

み中の課題の中からだったりと様々だった。わたしはブレインストーミングよりも具体的に過去の経験を探るほうが項目のなかに入りこみやすかった。今までスタッフの思いとか全体的な流れを考える事なく、流れにのって授業に参加していたのでこの原論Ⅰ、Ⅱをふりかえる課題で考えるきっかけが出来たことはすごくよかったと思っている。

また、卒業合宿の時にKさんから「南短の人間関係科の特徴は哲学部門が入っていることです。」というようなことを聞いていて、そのことを実感した。～論とつくことから連想することだが、自分はそれぞれの項目についての自分なりの定義付けを一生懸命していたように思う。わたしなりに哲学とは何でもありの世界・自分の信じたことがすべての世界なので、答えのない人関の授業はまさに哲学だと思っている。

1月に入ってから1回だけ残された授業では、先にも述べたように、まとめとして「旅立ち」になぞらえて2年間の自分の学びをシンボライズして書き出してみる実習 資料21 をした。それをレポートとして書き上げたものを読む限りでは、学生達はおおむね満足して学んだものをうけとめている。すこし具体性に乏しいとも思われるレポートもなかったとはいえないが、彼女達は学んだことをこれから生きていく中でより深く考え意味をもたせようとしていることをうかがわせた。学んだことは小さな種のようなものかもしれないが、機会あるごとに大切に育て、必要なときには勇気を持って自分の周りや社会のチェンジエージェント（Change Agent）となるエネルギーの糧となってほしいとねがっている。

（伊藤雅子）

## 資料 1-1

1999. 10. 27

◇◇◇人間関係論Ⅱ（1998年度・1999年度）の流れ◇◇◇

原題Ⅰ：これまでの文化から新しい文化を創造する

Aブロックのテーマ：私の世界・新しい世界・私の身近な関係を目を開ける

日時	テーマ	ひととき	やったこと	ねらい
1998. 4/ 9	これまでの文化から新しい文化を創造する	おひきの歌	私の世界地図	これまでの自分の世界を見る
17	この場・この人・そしてわたし	Aura Soma 光いろいろ	新世界探検① (新聞作り)	自分の新しい世界の場や人を知る
23	この場・この人・そしてわたし	聖書から 大森	新世界探検② (新聞作り)	ゲームで新聞作りをする
30	この場・この人・そしてわたし	聖書から 伊藤	新世界探検③ (新聞PRと配達)	ゲームで作った新聞を皆に紹介する
6/11	"とも" ろん①	おひきのテーマ	知-ズ777 "とも"	わたしの"とも"の中味を探る
18	"とも" ろん②		"とも"を考える	レポートで"とも"の中味を探る
25	"とも" ろん③	かみしばい	"とも"を考える	おひきの"とも" ろんを語る
7/ 2	懐かしの七夕を楽しむ	ある恋の話	パーティを楽しむ	
9	"とも" ろん④	おひきの講座	わたしの"とも"論 づくり	「わたしのとも論」を語る 「わたしのとも論」を探る
16	前期のまとめ	おひきの演奏	レポート作成	「あなたにとって生まれよとして新しい文化はどのようなものか」を記述する

## 資料 1-2

Bブロックのテーマ：人間文化にひたる・わく論

日時	テーマ	ひととき	やったこと	ねらい
1998. 9/24	帰ってきました、人間へ	夏休み後のワイワイ	夏休み課題「おひきの十色」のわかしあい	帰ってきました人間へ
10/ 1	ワクワクからわく論へ	おひきの作品に触れる	親梓越え 1985 わたしが梓を感じたとき おひきの中に見つけた梓	ワクワクから梓論へ
6	わく論②私の梓を表現する	おひきの「越智章仁」	様々な素材を用いて自分にある様々な梓を表現する	芸術の秋「私のワク」
15	わく論③私の梓を検討する	映画 「In a Box」	梓の検討、質、種類、自分との関係、名付け、わかしあい、裏返してみる	自分の作品をながめ、自分に影響を与えている梓を拾いだし、発想転換を試みる
22	わく論④梓を超えて		二人の梓超え、小笠原久恵さんと岡本真紀さんのお話	二人のゲストの梓超えの体験を聞き、自分の梓を更に深く考える

Cブロックのテーマ：人間文化にひたるへんか論

日時	テーマ	ひととき	やったこと	ねらい
1998. 10/29	へんか論① へんかを探るはじめの一步	十点鐘	アトミーズにより変化を振り起こし、その内容を777化してみる	変わることは何かを振り起こし、テーマを探りながら、一般化を試みる
11/ 5	へんか論② 私のななへんげ七変化	"変化"の全貌の提示	自分のLife Lineを描き、自分の変化を振り起こす	変化の全貌を参考にしながら、自分の変化をあとづける
19	へんか論③ 私の七変化を眺める	宮下高美夫の「誕生」	変化論777に基づいて考え自分にとっての変化を確認する	自分のななへんげを眺め、未来の変化の行動目標を考える
26	へんか論④ 視点をかえる PART 1	Aura Soma	変化論への様々な視点 伊藤・まじか	人が変わることの意義を様々な変化の視点を通して知る
12/ 3	へんか論⑤ 視点をかえる PART 2	おひきの777について	変化論への様々な視点 大森・山口	"
10	クリスマス会の準備	聖書朗読とわかしあい	クリスマス会の準備	
17	クリスマス会	クリスマス会を楽しむ		
1999. 1/14	後期のまとめ	おひきの演奏	全日程表に自分が学んだことを記入しながらまとめをしそれをもとにレポートを作成する。 春休み課題としてそれぞれ工夫して「人間知恵蔵」を作る	

資料 1-3

原論 II : 人間の文化を生きる、ステップアップにんかん

Aブロック テーマ: かかわる論

日時	テーマ	ひととき	やったこと	ねらい
1999. 4/16	ステップアップにんかん	ヒマナカ	「私の恋」、1年生FW科 モチベーションに向けて	2年目の決意
30	かかわる論① 関わるってなあに	中国古代の 礼儀	夏休み課題「人間知恵蔵」 のわからあい、関わる論 への導入、BS	BSの手法を学ぶ 日頃考えているかかわる論か ら研究テーマへ
5/ 7	かかわる論② わたしの かかわり 体験	映画 トワイライト	BSから作成したかかわる 論のシナリオ、「関わり万 華鏡」作成	かかわる論をてがかりに 自分のかかわり論を検討する
14	かかわる論③ 勇気ある かかわり	映画「ネル」をみて、いろいろな場面、登場人物のかかわり、ことば、 出来事などを考える		
21	かかわる論④ ネルと関わる人々	自然の音 川の川下り	再度、映画「林」を部分的 に見ながら個人対、個人で 整理、わからあい	三人の登場人物の関わり方の 特徴を明確にする
28	かかわる論⑤ ジェンダー性・男性・女性 を探る	自分を元気に する呪文をつ くる	グループにわかれ 3つのテーマ をめぐって「こんにゃく 談義」をする	前回にみた映画「林」の登場人 物の関わり方の特性を抽象化 してみる
6/11	かかわる論⑥ わたし のかかわる論モデルを 作る	7月 6月の生まれ の人に贈る歌	三次元的JNPかかわり論 行の基の上に自分のかかわり 論の行を作る “関わる”の哲学ニヒター	自分のかかわり論行を作り かかわり観、関係観の理解を 深める
18	我と汝、わたしと..	合唱「夏の 思い出」	「ひとときの対話」	「関わる」体験を体験する
25	みんなで楽しもう夏 至祭	学生有志企画による夏至祭を楽しむ		
7/ 2	私のステップアップ人間	自分にとってのステップアップ人間を一人 1分間スピーチで皆に伝える 終わりのひとときヒマナカ		
9	前期のまとめ	ステップによる ライブ演奏	原論前期のふりかえり レポート「私のかかわる論」 夏休み課題《あいのことば 集》づくり	自分の学びを確認する レポートを作成する

資料 1-4

Bブロック テーマ: あい論

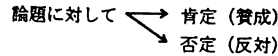
日時	テーマ	ひととき	やったこと	ねらい
1999. 9/24	あい論① きかせてよ 愛のことば	わたしの夏	〈わたしのあいのことば〉 集のわからあい 愛のテーマさがし	さまざまな愛に目をむける 自分の愛の捉え方の特徴に 目を向ける
10/ 1	あい論② 愛の定義づくり	わたしの愛の ことば集	愛だと思ふ例をあげ、そこ に共通する特徴から定義 をつくる。それを紛らわし い愛と照合して吟味	愛の概念を明確にする
8	あい論③ 愛の人間論	わたしの愛の ことば集	人間を通して現れる愛の 多様性に付いてニヒター とわからあい	愛の生死、愛の行、愛の排 他性、愛の規範、愛の裏面 について考える
15	あい論④ わたしの 愛のエネルギー	ギター演奏 ひまわり	私の愛のエネルギーを粘土を使 って形にする、その方向性 を描いてみる	自分の様々な体験を形にした り、作品と対話する中で、自 分の“愛”を確認する
22	とも論からあい論へ そして共に生きるへ	シマウタ	原論 I IIの流れをふりかえ り、人間生活での体験をふ まえ、残り時間を考える	原論からステップアップして、共 に生きる体験作りの意味に目 を向ける



## 原論 I 風 ディベートの進め方

### 【事前準備】

- ① 6月11日のグループで、論題に対して肯定（賛成）か否定（反対）の立場を取る。



### 【論題 1】

充実した人間生活を送るためには、固定したグループに属すべきだ。

- ・肯定派……1, 3, 4, 6, 8 グループ
- ・否定派……11, 14, 15, 18, 20 グループ

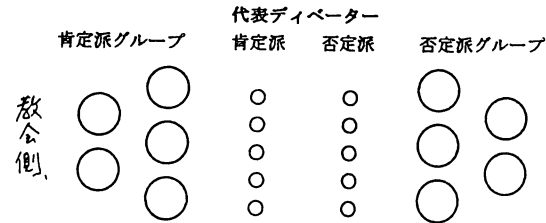
### 【論題 2】

友達好きな人に接近するためには、その子の許可を取るべきだ。

- ・肯定派……2, 5, 7, 9, 10 グループ
  - ・否定派……12, 13, 16, 17, 19 グループ
- ② 1) 自分達の立場を主張するための論点を話し合い、まとめる。  
2) ラベリング（本の目次のように論点の要点を箇条書きにする）する。
- ③ グループから1名のディベーター（代表者としてディベートに参加する人）を選ぶ。

### 【ディベート】

#### セッティング



ジャッジ（残りの人々）

#### 進め方

- ① 肯定派 立論 5分  
5名のディベーターが各自1分の持ち時間を使って、事前準備の話し合いでラベリングした意見を述べる。
- ② 否定派 立論 5分  
5名のディベーターが各自1分の持ち時間を使って、事前準備の話し合いでラベリングした意見を述べる。
- ③ 作戦タイム 3分  
肯定派・否定派それぞれディベーターが話し合っ、反対専門の作戦を立てる。
- ④ 否定派 反対専門 3分  
作戦に基づいて、肯定派に対して反論や質問をすることができる。
- ⑤ 肯定派 反対専門 3分  
作戦に基づいて、否定派に対して反論や質問をすることができる。
- ⑥ 評価  
観客は、ジャッジとして両派のディベーターを【論理性とアビール度】の観点から総合的に評価する（拍手の大きさで表現する）

資料 3

人間関係論 I  
1998.7.16.

人間関係学原論 I 前期 全日程表

月日	テーマ	私自身が新たに変わったこと
1 4/9	私の世界地図	
2 4/16	この場・この人・そして私 ～新世界探検①～	
3 4/23	この場・この人・そして私 ～新世界探検②～	
4 4/30	この場・この人・そして私 ～新世界探検③～	
5/7	人トレA 初エディション	
5/14	人トレA チーム作り実習 メニュー持ち寄り	
5/21	人トレA メニュー作り	
5/28	人トレA メニュー最終確認	
6/11	"ども" ろん(1) 加えてわたしの"ども"	
6/18	"ども" ろん(2) デザート"ども"の中味を探る	
6/25	"ども" ろん(3) "ども"を考える	
7/2	懐かしの七夕を楽しむ	
7/9	"ども" ろん(4) わたしの"ども" 論つくり	

資料 4

26期人間関係論 I  
1998. 10. 1

私が枡を感じた時

Blank space for writing, with a large hand-drawn rectangular frame at the bottom.

資料 5

人間関係原論 I  
1998.10.16

枠の検討

I. 枠はどんなもの？

①枠の質に関する点検

- 柔らかい ——— 堅い
- 軽い ——— 重い
- 強い ——— 弱い
- はっきり ——— ぼんやり
- 大きい ——— 小さい
- 複雑 ——— 単純
- \_\_\_\_\_
- \_\_\_\_\_
- \_\_\_\_\_

②自分との関係の点検

- 内側にある ——— 外側にある
- 自分を守る ——— 自分にとって妨げになる
- 緩したい ——— 強くしたい
- 自分を縛る ——— 自由にする
- \_\_\_\_\_
- \_\_\_\_\_
- \_\_\_\_\_

③名づけてみると

[ \_\_\_\_\_ ]

II. 枠を“裏返し”してみて

資料 6



To \_\_\_\_\_



From \_\_\_\_\_



To \_\_\_\_\_



From \_\_\_\_\_

資料 7

Journal  
わく論④  
枠を超えて

26期人間原論I  
1998.10.22

今日の収穫



1. 今日のお話を聞いて……

2. 私の「わく超え」に向けて……

3. わく論①-④はあなたにとってどうでしたか

来た時刻 :            学生 No.    氏名

資料 8

ブレインストーミング

～問題解決のための新しい発想やアイデアを生み出すための話し合い技法～

人数：6～8人、方法によっては15人くらいでも可能。

- ルール：1. 〔批判を禁ずる〕  
 2. 〔量を求める〕  
 3. 〔自由奔放〕  
 4. 〔アイデア結合〕

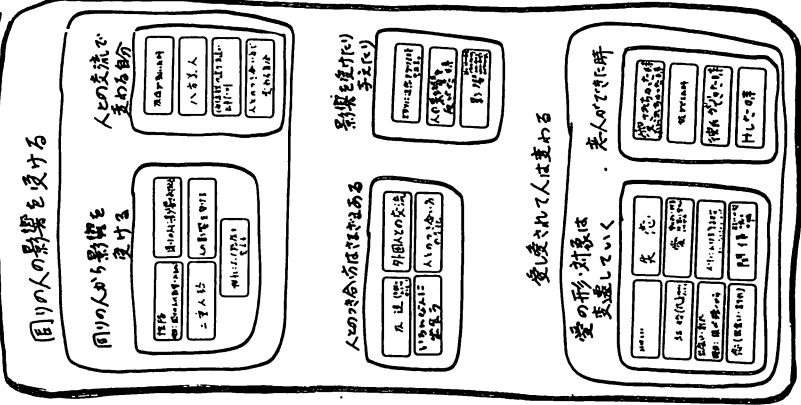
- 実施：1. グループに司会者・記録者（兼ねてよい）を決める。  
 2. 円陣または馬蹄形に座る。  
 3. テーマに関係のある、またはありそな自分の経験、知識、思っていること、思いつき、感じたことなどを即興的に発表する。  
 4. 記録者は、出されるアイデアをそのまま複製紙に記録していく（通し番号をつける）  
 5. 発言は、座っている順に回していく。アイデアが出にくくなったら自由に発言できるようにするのもよい。  
 6. くつろいだ雰囲気を作る。  
 7. 中だるみが起こっても、それを乗り越えると、さらに広がった視野から考えられるようになる。

# 変化論マップ

〒7: 26期生より80枚 (1998.10.29)  
制作: 98年原・輸入スタッフ (1998.11.2)

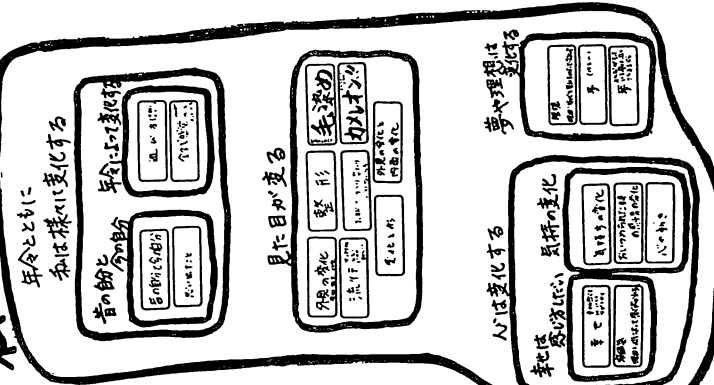
～皆からのテーマも～  
影響関係の大切さ

変化には時がある

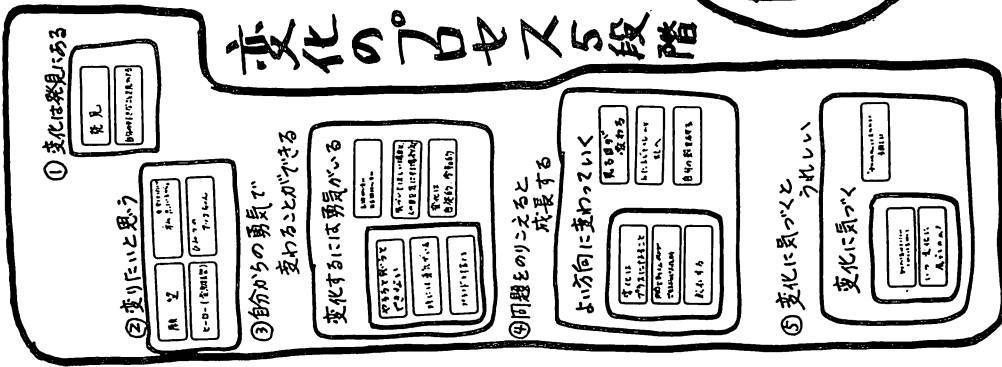


環境は変化する

## 私の変化の領域



## 変化のプロセス5段階



## 資料 10

◎私の七変化を顧みる

	いつ・どのように	特徴や傾向
外 見 ○		
心 ○		
夢 や 理想 ☆		

◎私にとって変化とは (気づいたことのみ)

## 資料 11

26 期原論 1  
1999.1.14

ニンカンでの 1 年を総まとめ

ニンカン文化発掘

## 『ニンカン知恵蔵』つくり

ねらい：人間関係科での 1 年をふりかえり、さまざまな授業での  
学びを統合する。

課題：

あなたは『ニンカン知恵蔵』の編集長です。

ニンカンでの 1 年をふりかえって、

ニンカンライフ

学び方や特徴

さまざまな授業

得意こと学んだこと

ニンカン文化のキーワードや語彙

ニンカンでの過ごし方

友達や先生

：

：

など、特集や記事や用語集をまとめて、イラストや写真を入れたり  
アイディアを凝らして、**世界に一つしかないあなたの素敵  
な本あるいはおもしろブック** (冊誌) を作って下さい。

本のタイトルは自由に考えて結構です。

これを見ればあなたの人間での 1 年間の学びが分かるようになる！  
こういうふうなものも制作しているわけですよ。

締切：2月22日 4時10分 人間関係科事務室に提出。

資料 12

**かわる論**

かわる論 ④

信頼(愛) 関わりは思いやり  
相手を思いやりして信頼し、自分もまた信頼し、愛の循環が生まれる。

相手も自分も大切に  
相互尊重 相互影響 相互理解

かわる論 ③

言葉と聴く姿勢  
聞き手は心を開放し、話し手は安心して話せる。

関わりは心を開く  
言葉は心の扉を開く。心を開くことで、本当の自分を知ることができる。

かわる論 ②

一方通行に  
じいし

人は色んな関わりを  
アス・マイス  
関わりと  
癒れる

関わりは人間にとって大切なことである。

**土壌**

デフ: 26期誌 46頁  
1999. 4. 30  
副題: '99年原論Ⅱスタッフ  
かわる論/アス・マイス  
各誌に

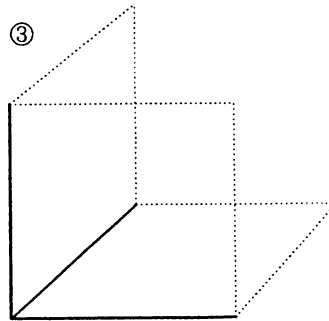
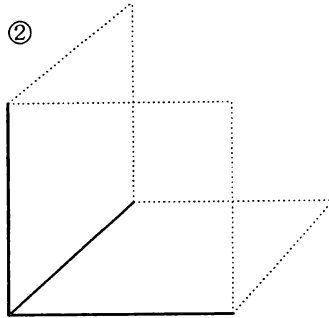
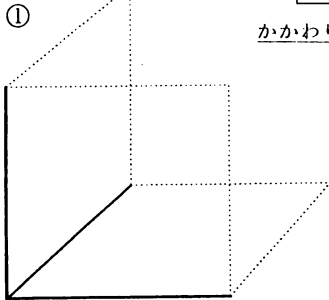
資料 13

No.	
インメモ	
出来事・会話など	
場面	

## 資料 14

### かかわりの三次元モデル

26期原論Ⅱ  
1999.6.11



## 資料 15

### 「関わる」の哲学

人間関係原論Ⅱ  
1999.6.11

#### ★古代哲学の問題意識

CF. アリストテレス（「関係」という範疇、アリストテレスの神は自己を認識して満足する）、  
プラトン（イデアという超越の世界への憧れを基にした人間の生き方）

「関わる・関わり」意識の希薄さ

#### ★中世哲学の問題意識

神と人間の関係

同じ地平にいる人間同士の関係は？

「個」の誕生

#### ★近世哲学の問題意識

「科学」の誕生、個の肥大化

CF. 自意識（自我）の哲学（我思う、ゆえに我あり…デカルト）

産業革命。土地からの遊離→都市への農民の流入→疎外（マルクスの唯物論）

#### ★現代哲学の問題意識

近代化の落とし→人間の孤立化

神の問題にも人間の問題にも自信を喪失した

都市化、機械化による生活のある意味での複雑化

人と人との触れあいの希薄化

○そのような状況の中から、伝統的ユダヤ・キリスト教の持つ「個」の尊厳の再発見

例：M. ブーバー（ユダヤ人）"Ich und Du"「我と汝」1923年

根源語⇒我と汝（Ich und Du）、我とそれ（Ich und Es）（CF. Du と Sie の違い）

ブーバーのねらい：各人が自らを大切に、相手を大切にるところから生まれる関係

（一人一人をかけがえのない全体として体験的に把握すること）

「我と汝」とは

他者→唯一独自の絶対存在、相互に肯定尊重する

我が自己の全存在をかけて汝に語りかけ、また汝から語りかけられるという対話的・応答的

関係の成立

「我とそれ」とは

相手を自分に対して対象として置く

例：一本の木

実生活では Ich-Es も必要、我と汝の関係は短い時間しか持続しない

しかし我とそれだけでは、充実した人間としての生き方はできない

人間の本当の生は「出会い」にある

「我は汝を通して我となる」

関係の相互性

排他性

出会いにおける現在性



## 資料 16

人間関係論Ⅱ  
1999. 7. 9.

## 人間関係原論Ⅱ 前期 全日程表

月日	テーマ	私のメモ
1 4/16	～ヒマナチア～ ｽﾀｯﾌﾟﾌﾟﾗﾝ にんかん 2年目の決意～「私の恋」	
2 4/30	かかわる論①関わるってなるに 「関わる」のイマジ、 アレン・ストーミン?	
3 5/ 7	かかわる論②わたしの関わり 体験。「かかわる論777」と 「かかわり万華鏡」	
4 5/14	かかわる論③ かかわり 勇気ある かかわり 映画《ネル》	
5 5/21	かかわる論④ ネルと関わる人々 VTRを見ながら個人対、整理 グループでわからあい	
6 5/28	かかわる論⑤ ジイ性・キウ性・林性を探る 「こんにやく談義」	
7 6/11	かかわる論⑥ 私のかかわる論行'をを作る 「かかわりの行'をを作る」 ミレナチヤ「関わる」の哲学」	
8 6/18	我と汝、わたしと…… 「ひとときの対話」	
9 6/25	みんなで楽しもう 夏至祭	
10 7/ 2	私のｽﾀｯﾌﾟﾌﾟﾗﾝ 人間 ～ヒマナチア～	

## 資料 17

26期生人間関係原論Ⅱ  
1999. 7. 9

夏休み大作戦 その2

## あいのことば集 つくり

ニンカンの夏

あなたの夏

にほんの夏

あなたの心に響く 響いた 響くであろう

あなたにとってのあいのことば集

アイ アイ アイ アイ

人は 出合い 愛を探し きづきあい 相し 天意うごめく

今までの自分自身の出合い

ドラマのことば

読書の中で

見知らぬ人のことばから

身近かなひとのことばから

などなど あなたの出会ったことば達

愛のことばのしおり集として

素敵なブックレットに取り組んで作って下さい

ニンカン2年目の夏

reflection のひととき

自分への素敵な思い出となりますように。

新学期の出会いのスタート日まで、

Bonnet vacance !! どうぞ よい 休暇を

資料 18

私たちの愛の定義

愛とは……	メンバー	まっひーの独り言
相手のことを思い、見返りを求めず、相手のために、心や体が動くこと。	新谷和英、末広直子、磯部 郡、清水葉織、川久保彰、山根京史	この定義によると、愛があると「相手のために心や体が動く」ということだね。
相手（もの）たとえば自然とかでも）のことを大切に思い、相手のことを考えるキモチ。そこから生まれるキモチや行動には理由がなく、また、見返りを求めない。 ※今話し合っている最中ですが、愛は永遠か、瞬間がなくなって瞬間になるのか、ずっと心の中に残っているものか。	たかさん、さよ、あい、ちか、しず	愛は、相手を大切に思う「キモチ」だ、という定義だね。でも、理由のない行動というのも不気味だよー。
・相手を思いやり大切にすること。 ・永遠でありながら形はかわる。 ・いろいろある。(十人十色) まとまりませんでした。	長沼智美、梅田千愛、鈴木真美、市川有香、小野信代	1つ目は定義になるけど、2つ目は愛の特性を言ってるようだね。
受け身よりは能動的に（「～される」より「～する」）、自らを犠牲にしつつ（本人はそれを否としない、犠牲と感ぜない、時もある。）大切にすること（こころ）。	安立江梨那、荒木愛、橋本彩、林砂子、本多佳菜恵	何を大切にするのが述べられていないけど、主体性・能動性を重視した定義だね。
相手を思いやって自然にできた行動。	マユ、トモミ、サオリ、マヤ、サチ、メグ	愛は「行動」であるという定義だ。でも自然に出てこない？ 考えたり努力したら愛じゃなくなる？
自分とまわりのものの幸せを願うこと。	武藤尚佳、市川有美、大村内ふみ、長縄かお里、千賀穂子	自己犠牲的にまわりのものの幸せを願うというのは愛とは言えないという定義。
互いに信じあい、許し合うこと。	笹井絵里子、野村はつみ、小笠原久恵、根地蘭由美、谷口仁美、まさこ先生も	愛は一方からの信頼や許しでは成立しない、相互的でないと愛ではないという定義だね。
相手の気持ちも、自分の気持ちも、大切にすること。	中村佳代、中谷京子、松岡さやか、山田貴子、小笠原悠美子	どちらか一方を大切にしたいのは愛とはいえないという定義だね。両者が手損する時にはどうしたら愛せるのか？
心と心の通い合い。	因枝里紗、川岸英香、山田章江、山田梨子、西村葵	これは非常に広い概念を持った定義だね。世界は愛にあふれている！
見返りを求めない、と考えただけで……、これ以上は思いつかなかった。ただ分かったことは、言葉では言い表せないむずかしいものだった、ということ。	長風順子、木村詠沙子、光田西、野村紗穂利、浜島千聡、原田聖華	これは何かを愛と判定するときの条件を述べているようだね。
大切な人だからこそ理解しあうものだ。	勝ひな、永見久美子、杉浦志弥、坂口真理、根田まきえ	愛は大切な人同士の間には理解しあっているという意味ですか？ 文章の意味がよく分からないよ。
お互いの関係性によって変わるものである。	片岡ゆめ、杉浦広恵、水野麗子、村瀬知里、平原真紀、長谷川直美	これは愛というものの特性を述べているようだね。
自分一人ではわからない、みんな（自分の周りにいる人）がいるからわかる。	松山郁代、松山英江、安藤純子、幸村江里、倉科真子	これも愛の特性を述べているようだね。
永遠を思いながら、その時、目の前にいる相手とかかわること。	伊藤穂子	さすが！ 穂子先生にとって永遠とはキリストのことなのでしょうね。
相手にとって、よいと思われることを考え、そうなるように願ひ、そうなるように行なうこと。	大森正樹	相手にとってよいと思われることを考えることが、でも「経営」の真諦は別に考えたいそうです。
相手を大切に思う心を持ち続ける意志のこと。	山口真人	愛は持続する意志、という定義をしました。ちなみに、愛は一時の情熱。
あいとはひととの かかわり への 力そのもので、自分からではなく自分たちを通して実る神からの賜物。	まどか磨代	愛は力、しかも自分の力ではなく神からの賜物、正しい愛。本人曰く「書いた後に変わった？」

資料 19

愛とは……	メンバー	まっひーの独り言
相手のことを思い、見返りを求めず、相手のために、心や体が動くこと。	新谷和英、末広直子、磯部 郡、清水葉織、川久保彰、山根京史	この定義によると、愛があると「相手のために心や体が動く」ということだね。
相手（もの）たとえば自然とかでも）のことを大切に思い、相手のことを考えるキモチ。そこから生まれるキモチや行動には理由がなく、また、見返りを求めない。 ※今話し合っている最中ですが、愛は永遠か、瞬間がなくなって瞬間になるのか、ずっと心の中に残っているものか。	たかさん、さよ、あい、ちか、しず	愛は、相手を大切に思う「キモチ」だ、という定義だね。でも、理由のない行動というのも不気味だよー。
・相手を思いやり大切にすること。 ・永遠でありながら形はかわる。 ・いろいろある。(十人十色) まとまりませんでした。	長沼智美、梅田千愛、鈴木真美、市川有香、小野信代	1つ目は定義になるけど、2つ目は愛の特性を言ってるようだね。
受け身よりは能動的に（「～される」より「～する」）、自らを犠牲にしつつ（本人はそれを否としない、犠牲と感ぜない、時もある。）大切にすること（こころ）。	安立江梨那、荒木愛、橋本彩、林砂子、本多佳菜恵	何を大切にするのが述べられていないけど、主体性・能動性を重視した定義だね。
相手を思いやって自然にできた行動。	マユ、トモミ、サオリ、マヤ、サチ、メグ	愛は「行動」であるという定義だ。でも自然に出てこない？ 考えたり努力したら愛じゃなくなる？
自分とまわりのものの幸せを願うこと。	武藤尚佳、市川有美、大村内ふみ、長縄かお里、千賀穂子	自己犠牲的にまわりのものの幸せを願うというのは愛とは言えないという定義。
互いに信じあい、許し合うこと。	笹井絵里子、野村はつみ、小笠原久恵、根地蘭由美、谷口仁美、まさこ先生も	愛は一方からの信頼や許しでは成立しない、相互的でないと愛ではないという定義だね。
相手の気持ちも、自分の気持ちも、大切にすること。	中村佳代、中谷京子、松岡さやか、山田貴子、小笠原悠美子	どちらか一方を大切にしたいのは愛とはいえないという定義だね。両者が手損する時にはどうしたら愛せるのか？
心と心の通い合い。	因枝里紗、川岸英香、山田章江、山田梨子、西村葵	これは非常に広い概念を持った定義だね。世界は愛にあふれている！
見返りを求めない、と考えただけで……、これ以上は思いつかなかった。ただ分かったことは、言葉では言い表せないむずかしいものだった、ということ。	長風順子、木村詠沙子、光田西、野村紗穂利、浜島千聡、原田聖華	これは何かを愛と判定するときの条件を述べているようだね。
大切な人だからこそ理解しあうものだ。	勝ひな、永見久美子、杉浦志弥、坂口真理、根田まきえ	愛は大切な人同士の間には理解しあっているという意味ですか？ 文章の意味がよく分からないよ。
お互いの関係性によって変わるものである。	片岡ゆめ、杉浦広恵、水野麗子、村瀬知里、平原真紀、長谷川直美	これは愛というものの特性を述べているようだね。
自分一人ではわからない、みんな（自分の周りにいる人）がいるからわかる。	松山郁代、松山英江、安藤純子、幸村江里、倉科真子	これも愛の特性を述べているようだね。
永遠を思いながら、その時、目の前にいる相手とかかわること。	伊藤穂子	さすが！ 穂子先生にとって永遠とはキリストのことなのでしょうね。
相手にとって、よいと思われることを考え、そうなるように願ひ、そうなるように行なうこと。	大森正樹	相手にとってよいと思われることを考えることが、でも「経営」の真諦は別に考えたいそうです。
相手を大切に思う心を持ち続ける意志のこと。	山口真人	愛は持続する意志、という定義をしました。ちなみに、愛は一時の情熱。
あいとはひととの かかわり への 力そのもので、自分からではなく自分たちを通して実る神からの賜物。	まどか磨代	愛は力、しかも自分の力ではなく神からの賜物、正しい愛。本人曰く「書いた後に変わった？」

愛とは何かを愛と判定するときの条件を述べているようだね。

愛は「行動」であるという定義だ。でも自然に出てこない？ 考えたり努力したら愛じゃなくなる？

愛は一方からの信頼や許しでは成立しない、相互的でないと愛ではないという定義だね。

愛は持続する意志、という定義をしました。ちなみに、愛は一時の情熱。

愛は力、しかも自分の力ではなく神からの賜物、正しい愛。本人曰く「書いた後に変わった？」

とも論からあい論  
そして共に生きる

✿ ともに生きるために ✿

ニンカンの残りの時間をどように過ごすか  
(自分はどようにここニンカンでともにあろうとしてきたか  
どようにここニンカンでともにあろうとしていくか)

NO \_\_\_\_\_ 氏名

旅立ちの準備

この2年間で出会った人や物、体験したことや学んだこと、道具や技などを、これからの人生の旅立ちの時の持ち物にたとえると？

持っていきたいもの

- ・自分らしい服……
- ・よそおう服……
- ・常備薬……
- ・お気に入りのマスコット……
- ・決心する時に使うもの……
- ・目覚し……
- ・持っていきたい本……
- ・暇な時に役立つもの……
- ・いらないけど持っていたいもの……
- ・おやつ……
- ・お守り……
- ・
- ・
- ・
- ・
- ・
- ・
- ・

置いていきたいもの

- ・ニンカンに置いておきたいもの……
- ・銀行の金庫に保管したいもの……
- ・人にあげてもいいもの……
- ・ごみとして捨てたいもの……
- ・
- ・